

明治二十八年八月五日發兌
女鑑
第九十八號
東京國光社

女鑑第九拾一號目録

節婦くに子



婦人の任務及其の任務を完うすべき方法を明にす（六）（完）

（と）國體及國風

古昔聖神至德を以て民に臨み、臣子至精を以て之に仕へ、上下一致、君民力を協せ、以て國土を經營し、以て社稷を保全してより、世々代々相承け相繼き、傳へて萬年の今に至りて、皇威愈昌に、王風益振ふ是れぞ此れ、我が國體の、新奇神聖宇内に比なく、世界に二なき所以なる。

夫地球廣袤壹萬里、其の邦國十百千と雖、金甌飲けず、傳へて以て千万年に至れる我が皇國の如きはなし。支那、印度、土耳古、埃及、此等は世界の舊國と

いか、然れども因循萎薾、國威振はず、人材出でず、日に比鄰の侵侮を増し、歳々危亡の域に入る。其の他西洋英、佛、獨、露、諸國、朋黨幾多、各個皆自是とし、朝雲暮雨擾騒として、適從する所を知らず。乃國是定まらず、兵財足らず、或は議院解散の不幸となり。或は内閣更迭の不祥となり。事曲紛々、是非嗷々、而して得べき利反て之を失ひ、受くべき益反て之を遺る等の弊、常に言ふに勝ざるものなり。蓋皆定義なく、常守なし。決議斷案なく、雄圖壯擧なし、恥を含みて不平を藏し。垢を嘗めて微名を殉ふ。似たり寄たり、姑息糊塗一も珍なるものあるを見ず。是其の國家覇道に就りて、王道に成らざる故なり。私利を以て先として、公義を先とせされはなり。聖賢の道にあらず、帝王の治にあらず、支那、印度、埃及、土耳古相を距ること幾許ぞ。

夫皇國、外國と、各殊なること此の如し。是其の故何くに在る、他なし、我が國民の腦裏、一點の私字を着けざる故のみ。只其の一點私字なきもの、即天地と終始して、不朽に傳ふる所以なり。

如夫山川の蒼々淑潔たるは能く神を寓し、土壤の脉々たるは、此に甘美の食を生ず、地靈人傑天下比なき、是固天然にして、人爲にあらず。然れども人爲時に天然を制伏す、私情公道を誤まること古今の例は乏しからず。此に由りて之を言へは、我が國體至りて重く、國風極めて貴しとも、而かも時あり、消長汚隆の變を見ること止むを得ず。且外國通交以後、此の風殊に著し。外教渡來外人雜居已降、此の事特に甚し。（三韓及漢土西南蠻等の事を云、今の事にはあらず）人增せば水增す理、決して怪むに足らずして、而して今後四年の事、亦最も想ふに足る」惟ふに種

族の變化は、宗敎道德すべて一切の變化をなさむ。遂に國訓國旗をも變化せしむるの災害なからむことに注意するは、現に眼前の急務たり。

嗚呼夫威武支那に展びて、歐洲に伸びざるは、世人の悲む處なり。石潤ひて、雨來る、浸潤の譖、膚受の愬、今豫め之を塞くは、吾人信ず、今の時務と。

然れども吾人只雜居をのみ言ふにあらず。殖産、起業、富國、强兵、汎くすべて之を言ふなり。而も所謂殖産、起業、富國、强兵、元皆端を、家政に發す。家政整ひて、國政立つ、國富まざるを憂とせず、家富まざるを憂とす。兵足らさるを患とせず。財足らざるを患とす。家政の任ある者此に察し、衞生、敎育、風俗、交際、或は道德、或は經濟、各應分に之を勉め。勉めて倦まず、以て斯の國家をして、其の果して無比無二といふ實を、擧げしめずはあるべからず。

論説

女子文學の本色

大町桂月

日月の明かなるは一なれども、日光は赫烈として畏るべく、月光は鮮妍にして愛すべし。即ち日光は強きを以て優り、月光はやさしきを以て勝る。而して、日月ならび麗りて以て天の美をなす。能く相共に其足らざる所を補へばなり。今夫れ男子は日なり。女子は月なり。男子は日光の如く強かるべく、女子は月光の如くやさしかるべし。男子にしてやさしきに過ぎ、女子にして強きに過ぐるは、共に其本色にあらず。これたゞに日常の言行に於て然るべきのみならず、文學に於て殊に其然るべきを見る也。

女子文學の事、余已に之を論じぬ、女子文學の勃興するは喜ぶべきなり。而し

て、所謂女子文學は如何なる方法を取りて進むべき乎、これ余が玆に說せんと欲する所なり。男女兩姓が共に世にあるは、各其用なしとせむや。男子の性は剛なり、故に男子は外を治むるに適す、家政、育兒、裁縫の事などは、其適する所にあらざるなり。女子の姓は柔なり、故に女子は内を治むるに適す、兵事、航海、政治の事などは、其適する所にあらざるなり。文學に於ても亦異なる所なきを得んや。

余は斷言す、文學も男子は男らしかるべく、女子は女らしかるべしと。砂糖の甘きは、其性なり、生薑の辛きは、其性なり。砂糖は甘きを以て用をなし、生薑は辛きを以て用をなす。砂糖はあくまでも甘かるべし、生薑はあくまでも辛かるべし。男子願くは其强きを利用せよ。女子願くは其優しきを利用せよ。男

子にして女らしきと、女子にして男らしきとは、共に取るべからざる也。眞淵翁曾て奈良朝を男子の國といひ、平安朝を女子の國といはれけるが、げに雄健なる奈良時代の歌は男らしく、優美なる平安朝の歌は女らしく、明かに其けぢめあるを見るなり。平安朝の初に在ては、男子は漢詩漢文に淫し、和文はいやしみて女文字と呼べり。されば、貫之以後男子も餘力を和歌、和文に用ふるに至りしかど、女文字と呼ばれ、女子の國と呼ばれし丈けありて、所謂和文、和歌なるものは、いと優美にして、最もよく女子に適するものとなれり。余はあくまでも之を保存せむことを望む。漢詩漢文の如きは之を我國の女子に勸めず、漢詩漢文の長ずる所は雄壯に在て、優美にあらざれば也。

以上は、唯、形に就きて云ひしのみ、想なるものに至ては、殊に女らしきを要

す。和文、和歌は固より、漢詩を作るにもせよ、其想を着する處、飽くまでも優美可憐にして女らしかるべきこと、實に女子文學の本色なりと信ず。そもそも、女子は愛の源泉なり、慈悲の本躰なり。世は澆季となりて、人は浮薄にながるれど、さすがに、女子の清き胸は未だ全く世の風塵に汚されず、至情の磅礴する處、鬼神を泣かしめ、あらぶる武士をも柔らぐべし。あはれ、其一心のまことを文字にそゝがば、いかに、めでたき文學とならむとすらむ。花蕋夫人とやらの詩に、「君王城上竪降旗、妾在深閨那得知、十四万人齊解甲、也無一箇是男兒」とあるは、慷慨悲壯ならざるにはあらねど、讀み去て、唯沈痛と叫ぶのみにて、別にやさしと思ふ節もなし、女子の詩歌は、此の如き氣概あるを要せず、どこまでも女らしくありたきなり、彼千代女の、「朝顔やつるべ取られ

てもらひ水」と云ひ、「とんぼつり、今日はどこまで往たやら」といふが如き、女性の眞情見えて、動かざらむと欲するも得べからず、讀誦の際、何となく涙のこぼるゝなり。

衣通姫以下、女子の歌は、なべて可憐なるが中に、王朝文學の代表者といふべき紫式部こそはとりわきて女らしき文學者なれ。其人物性行の女らしきは更にも云はず、其文章なり其着想なり、みな優美ならぬはなく、源氏物語一部、或は淫靡の嫌ありといふ人あれど、すべて是れ物のあはれをうつせるものにて、何處を見ても、可憐にして、同情を表するに足るべきものあり。清少納言は、紫式部と文名を同じうすれど、こは女にして男らしく、動もすれば、奇矯に陷り、可憐なる趣を欠く、所謂男優りのゑらものなり。かゝる人は餘り望ましか

らず、また尋常女子の學ぶべきにあらず。虎を描かむとすれば、動もすれば狗に類するを免れざればなり。

世に男優りの女子なきにあらず。また女により優柔なる男もなきにあらねど、概して、天性既に異なる事あり、女子にして男子の假面を被りて、强ひて强剛ならむとするは、決して得策にあらず。女子が文學上に眞の伎倆をあらはすは、その女子の眞情を發揮するに在り。文章の彫琢は人を動かす所以ならんや。近時文學の隆興するにつれ、女子にも文學に堪能なる人多く輩出せり、而して果して女性の心情の美を發揮する人ある乎。小説の如きは、文學の發達せるもの。女子の筆を玆に染むるを亦妨げずと雖も、誤て野卑となる勿れ、醜陋となる勿れ、無殘深刻なる勿れ、同情餘りありて看察の細かきは、女子の長ずる所、女

子たる者、宜しく此點を利用して、文學上に地步を占むべきなり。

女界一則

坂本三七郎

輕薄の才子多情の婦女が、勢利を慕ふて嫁し、容色を擇んで娶るが如きは、吾人固より之を論ぜず、然れども夫婦の道人の大倫にして、一身一家の盛衰榮辱は皆な是より生じ、子孫の禍福茲に基する所以を知らば、其嫁娶婚嫁の際に於て、獨り夫の其婦を擇むのみならず、婦も亦た深く夫の性行職業等を擇び、其己の性に適するや否やを知らざるべからず、世の父母たる者其愛女を嫁するに當りて、衣裳の美、奩裝の具を備ふる、頗ぶる心を盡すと雖ども、獨り其夫を撰擇せしむる事に至りては、意を用ゐざる者多し、是れ豈に子女を愛する者

と謂ふべけんや、吾人は古來節女貞婦の傳を讀む每に、頑夫劣壻の苦しむる所となり、尙ほ其節を守り貞に死して悔ゐざるを歎じ、且其心を憐まずんはあらず、是れ其嫁娶の時に於て、其夫を擇むの足らざるに坐する者多し、若し其始めに於て之を擇み、父母之を欲し、其女も亦た之を望み、而して後に嫁せしめむ、後人事の變に遭ひ、窮厄悲慘の境に陷るあるも、是れ所謂人事を盡して天運の不幸を蒙むる者、其心に於て悔ゆる無くして命に安んじ、心を慰むるを得べきなり、徒に女子を束縛し、其心を屈從せしめ、而して其貞たり節たらんことを責むるは、吾人婦女子の爲に、回護辨難せざるを得ず。

我國女流社會の狀態は維新以來非常の激變を起し、歐波米濤、一時邦內に橫流す、髮は螺樣に非ざれは美ならず、服は蜂腰に非ざれは妙ならずとし、女權の

擴張を唱へ、男尊女卑の弊を喝破す、是に於てか、其極に馳せて、男女交際の論盛に、自由結婚の風行はるゝに至る、當時の有樣を見れば、本邦古來の淑德貞靜の女風は、殆んど破れんとするに至れり、之が爲め識者大に之を歎じ、之を匡救するの術を講ずるに至りたりと雖とも、之を救ふこと急激にして、古來女大學流の女敎を以て、之を挽回抑壓せんと欲せり、積極、消極の端相軋り、相擊ち、女子敎育の道、殆んど其軌道を失ふに至る、今日に至りて女子の敎育海稍〻風死して、波靜なりと雖とも、彼れ十年前自由結婚の弊、男女同權の害に懲りて、婦たる者其夫を擇ぶことに於て、又鉗制束縛して、自由ならしめず、是れ吾人が角を矯めんとして全牛を殺すの歎ある所以、又た女子終生の浮沈を思ひて、恨む所以なり、然らば則ち之を擇ばしむるの道は、如何せば可ならん、

曰く、舞踏會場握手の間にあらず、音樂唱歌の席、琴心を以て挑むゝあらず、父母既に其夫を擇び、其性行の如何を知り、其職業の如何を考へ、而して後更に其女をして之を選擇せしめ、是非諾否の決其意思に任せて、決して父母の愛憎を以て、褒貶し之を抑制すべからず、此の如くにして、媒人禮成り、偕老の盟終らん、何ぞ手を握り膝を交へて、而して後に其人となりを知るを用ゐんや、吾人の此語を爲す、貞淑の女子に向て擇選の自由を十分に與へんと欲する者なり、彼の阿天婆女流に向つて、謂ふにあらず、本邦固有の貞淑靜閑の良女子が、抑壓束縛せられて、不幸にして頑夫に嫁し、尙ほ貞を盡し節に死する心を憐み、穴を救はんと欲するゝ出づ、世の父母たる者何ぞ其愛女が爲ゝ、之の自由を與へざるや。

駿馬空載癡漢馳、好妻常添拙夫睡、とは是れ詩人の古昔女流が、拙夫癡漢に嫁して不幸に沈淪するを歎ぜしにあらずや、壓抑益甚しく、自由の道愈塞がるに及んでは、怨悲絶叫、歌て曰く人生勿爲婦人身、百年苦樂頼他人、是豈に痛恨の詩にあらずや、今の世は女子を奴隷視するの時にあらず、女子物件の期は、既に過ぎたり、然るに尚ほ世多く其夫を擇むに女子を束縛拑制して、強て父母の意に從ひて、命に服せしめんとする者を觀る、吾人是等女子の爲に、此詩を唱て、父母に訴へんとす、愛女を敎ふること、十餘年其芳心を養ひ、其淑德を蓄へしめ、其一身浮沈に關するの嫁期に及んで、之を懲らしむ、嗚呼其女を愛する所以の者は、却て之を害する所以なり、歐米風潮の反動と、古來女大學流の因襲に由ると雖ども、今日女子敎育の盛なる時に及んで、此の如き現

象あるは、是れ又何ぞや、吾人烈女貞婦の傳を讀て、既に之を悲しみ、又た近頃親しく此事あるに接す、嗚呼女をして其夫を擇ばしめ、琴瑟相和して、偕老の盟深く、而して後に人事の變に逢遭するも、天に安んじて悔いず、而して其芳心淑徳は益其光を發せん、女子教育の貴ふべきは、此にあり、此の如くにして、良妻貞婦は將に歌はんとす、妾心古井水、波瀾誓不起、と大和撫子の美にして善なる、此に於てか万邦に誇るに足らん、世の父母たる者何ぞ吾人の論を讀で一顧の勞を爲さゞる、敢て一篇を寄す、

故人　間宮　ハナ子

にしやまにゆふひかくれてかやりびの
けぶりのすゑにのこるなへかな

史談

節婦くに女の事

壚井ふく子

雨は、草木の親とおもへど、うれしきものにはあなれど、昨日も一日かき暮らし、よべも終夜ら、今日も又ひねもす降りつゞけ、明日も晴るけしきの見えぬ此の頃のやうにては、唯、憎く、うるさく、萬ものうくのみ覺ゆるに、誰れにまれ、語りあふ人もと思へど、何處にも雨にふりこめられてぞや、訪るゝ人もあらず。かゝるときころ、昔の人をと思ひて、舊き新しき書、彼れ是れと繙くに、遠き昔近き昔、昔の人には、めでたく、なづかしく、いとほしく、悲しく、やさしく、あはれなるが多かり。そが中には、みよし野の花のごとく、よき人によしと、世の中にうたひはやされたるもあり。又、名もなき谷間の花の如く、知れる人もなく、うたふ人も無く、世の中に忘られたるもあり。世に普く知られたるは、今更に書き記すべきものにもあらず。世に忘られたる如ききはゝと思ひて、書きつけたるが中に、近き昔の人にて、遠き世の橘姫袈裟などにも、たぐへまほしきあはれなる節婦くに子といふありけり。

くに子は、東京府の士族なる諏訪部某といふ人の後妻なりけるが、家には二人の子供ありて、皆前なる妻の生めるにて、長なるは既に十八歳になりけるが、疾の爲めに、ふと双眼を失ひて、物をえ見ず。次なるは、四歳ばかりにして、わづかに

乳をはなれたるのみ、未だ西東も分かぬ幼子なりけり。

心ある女子のほどならでは、大かた、世の中の繼母のまゝ子におけるは、尊きも賤しきも、高きも低きも、都にも鄙にも、皆これをいとひ惡むが多く、其の子の姿うつくしく、才すぐれ、藝能も長じ、孝養怠りなく、萬に柔しく、父母の敎のまゝにかしづきたれどとて、大方に、生みの子の如くは、美しとも、勝れたりとも、やさしとも、悲しとも譽めず喜びず。心なききはは、なかく\に、これをそねみ、ねたみ、憎みなどして、益々譏しみて仕かふれど、いよく\憎み、遂には、夫に讒し、不孝者不義者などゝ、よからぬ名さへおはせて、家より逐遣る事などするもの少からず。甚しきは、あさましき毒などもりて、無慘にも、われと殺し等すなど、禽獸の中にも絶へて聽かざるばかりの行ひをするものもありとか。さまではあらずとも、人の子のやうにも思はず、出入りに、起臥に、牛の如く、馬の如く、叩き散らし、罵じりちらし、露ばかり哀れもかけず、かへりみもせぬ繼母の多きが中に、くに子は、少しも、さる繼母のまゝしき心なく、前妻の遺しゝ子なれどとて、皆我夫の子なり。我夫の子なれど、又わが子にあらじといふことあらじ。余も前妻に、おなじく我夫の妻なり、前妻のいとはしみたる我夫の子は、わが又いとはしき我夫の子なり、なづかしの子なりとて、盲なる子をあはれみいたはれる其の赤心の片はし、其の行ひのなかばをも、拙き筆に言葉には、なかな

かに、いひあらはすことの難きぞ、口惜しや。立つ時には杖となり、坐すときは柱となり、食事には、必ず自ら椀をとり箸をもたせやり、行く時は親しく手を携へて、躓かぬやう、轉ばぬやう、心を添へけるぞやさしき。

次ぎなる子を、又いつくしみ育つる事は、兄なるにも劣らず。殊に、成長せば家の柱となるものなればと思へばにや、敎の道正しからぬ世の中の人の子に、立ちまじる事を恐れ、又、馬車などに引かれやせむ等を氣遣へば、終日已が傍を放たず、書を取りひらき、繪を取り出し、昔の物語りより、父を尊ぶべき道、兄に仕ふべき理など、說き敎へ、始終柔しくいつくしむものから、誠の生みの母のごとく、母上〳〵と慕ひまつはるを見ては、なほ更に、いとはしくかなしくなりて、世に二つなきものと、めでさすり敎へ育つるさまは、近き隣りの語り草とさへなれりとぞ。

人に子のやさしかりけるは、啻に是れのみならず。此の年月、不幸のみうち續きしものから、家はいと貧しけれど、それを露ばかり厭ふけしきもなく、朝夕の炊ぎの業より、何くれと貧しき家の、忙しき營みを怠らず、萬事に心を用ゐて、よく家を理めたるのみにても、人の妻なるもの〻鑑とすべし。

さまで廣きにはあらぬも、家計を助けむとてや、白川縣士族田上一英といへる人の乞ふま〻、屋中の閑室を貸居たるが、くに子も、もと細川侯に仕へたる事ありて、田上氏も、又其の侯の舊臣にて

ありしかば、くに子の心をもよく知り、且は一方ならぬ貧困なるをあはれみて、折りふし貸し呉れたる金は、五十圓にもあまるばかりになりぬ。然るに、ある時、田上氏、金二十圓を机の上におきたるが、事に紛れて、其儘他出なしたるに、くに子の夫なる人、其の金を見るより、貧困にせめらるゝ苦しさのあまりにや、ふと心動き、彼ればかりもあらば、昨日今日とみの飢餓をも凌れ、かつは、妻にも少しは安堵さすべき事もやと、淺ましくも魔心起りて、人知れず取らむとなしたるを、妻は早くも其の事を知り、あきれまどひて、こはあさましやわが夫、いかに貧苦に迫まればとて、人は人なり人の中にも、武士のかずにもかずまへられし御身にはおはさずや。主の居らざれば、よくよくうしろ見をもなすべきれん身の道にしあるものを、主のあらぬを幸ひに、うしろめたくも、汚き事をなして、天も地も知らぬとおぼしめし給ふか。さる淺ましき御身にもましまさゞりしを、かゝるあやしき御心のうかせ給ひしも、全く自らが家を理め費をはぶく事の拙ければこそ、御身にも子にも、自由を欠かせ奉るものから、さるおん心もつかさ給ふならめ。如何なれば、此身はかくも拙く甲斐なく生れしならむ。のう我夫、今日よりは、一層心をも力をもつくして、家をも理めまつらむ程に、家の爲め、又我子の行末をも思ぼし給ひて、さる淺ましき心のみは、夢起し給はぬやう、呉々も願ふになむ。孔子は餓ゆとも、濁り江の水は飲まずとか、申侍りぬ。些かなる惡き事と

て、一度犯しては、消ゆる事はかたし。のう我夫とて、泣つ恨みつ、諌めけれど、夫なるも、大に耻ぢて、おん身のの給ふ處、誠にことわりなり。我も、もとよりすまじき事なりとは思ひしかど、餘りに、おん身に、いたはしき苦勞をぞ懸くる事の悲しさに、これだにあらむ、暫時しが程はと思ひて、心ならずも、あさましき心起しぬ。御身の正しき諌言なくぞ、遂に禽獸の中にも踏りけむものをとて、且は耻ぢ且は詫びなどして、金子をも取り出で、もとのやうに返し置きたるに、くに子も大に悦び、涙をぞ流して、數ならぬ言の葉をも、聽き入れ給ひて、速にうけひき給ひし事の嬉しさよ。のう我夫、此の身の、貧しさ故に、如何ばかり辛きめを見、苦しき思ひなせぞとて、うしろめたき業を爲さむよりは、中々に、心安くなむ侍る。御身も、又麥の飯襤褸の衣厭はせ給はで、必ず〳〵、淸き潔き御本心をぞ忘れなし給ひそ。いつかは、又長閑けき春に、逢ふ事も侍らむに、我身等の事、夢思ひな給ひそとて、返す〳〵も諌めたりしは、誠に有り難き人の妻にこそありけれ。

さるに、夫なるものは、くに子が赤心つくして、泣つ恨みつして、諌めたりしに、一度は、耻ぢて、本心に立ちかへりしかど、猶借財等の重なる困苦にせめ立てらるゝ苦しさに、兎角迷ひの晴れずして、遂にかばかり誠ある妻が諌言をもあだになしたる夫の振舞こそ、甲斐なく口惜しき限りなれ。

さて、一英子翌日になり、彼の金子を用ゐむと思ひしに、机の上にあらず。さては、此處にか彼

處にかとて、尋ねたれどあらず。家の人をも呼び立てなどして、騒ぎ散らすに、妻は驚き、昨日我夫が淺ましき振舞を爲し給ひし折り、慥に自ら受取りて、机の引出しに入れ置きしものを、あらずとはいぶかしや。我が夫の再び淺ましき心を出だし給ひしにか。否々、さばかりに口惜しき人にはあらじ。去りとて、彼處より來れる人もなきに。さらば、稚き兒がもて遊びしか。いな〳〵、彼室には、兼て子供は入れぬものを。あやしさの限りやと、思ひ惑ひつ、共〴〵に、さま〴〵搜索したれど、遂にあらず。一英子は、忽ち坊署に訴へしに、巡吏も來りて、さま〴〵調べしに、遂に、戸主の業と定りて、夫なる人は、官署に引れ行きぬ。くに子の歎きは、一方ならず。淺ましや悲しやと

ばかりに、ふしつまろびつ、正体なく、我をも忘るゝばかりに泣き志づみしが、何をか思ひ決しけん。漸くに起き上り、瀧なす涙を、袖にて掃ひ掃ひ、一英子のもとに行き、妾さきに細川侯に奉仕たりし折より、君の恩遇を受け奉ること、一方ならず。殊に、去年以來大金さへ貸し給はり、幸に家内の者の餓うる事もなく暮し侍りたるも、一重に御身の厚き賜にてあれば、露ろかに思ひ侍らぬものを、夫が一時の心迷ひより、不善の振舞をせられしも、皆、自らが家計の營みの惡しかりし故のみ。且は、我が身、人の妻にありながら、其夫の不良を諫め盡くさずして、遂に不義に陷らしめしは、皆妾の不束なる罪ぞかしとて、返す〴〵詫びなどして、我室に歸り、母様よ〳〵と泣きさま

つはる次なる子を抱き上げ、こや我が子よ、汝ればかり幸なきものはあらじな。生みの母御には、幼くてわかれ、今又、此の養ひの母にも、おくれむとはするか。よしや、此の母の見ねずなるとも、わけなく泣きなせそ。疾く大人しくなりて、父上に孝養を盡くし、兄御をもよく痛はり給へや。若し此の母の亡くなりなむ後にても、必ず〳〵惡しき行ひはせそ。正しく直ぐに生ひ立ち給へやと、それとなく、說きつ諭しつするに、いわけなき心にも、何となく悲しく思ひてにや、母の顏をぞうち守りて、いぶかしげに、母樣泣きな給ひそ。自らは、彼の繪に見たる子供のやうに、常々語り給へる話しの如く、父上にも兄上にも母樣にも、大人しく仕へ侍らむに、我が身をばをきて、何地へも行きな給ひそと、わけもなく云ひまどふに、くに子はいとはしさ限りなく、か丶る愛らしき者をゝきて、何地へかと思へば、悲しさも一入にて、湧き返へる心地なりしかど、斯くていつまであるべきにあらじと、心强う思ひ返して、近き家の人の來るを幸に、暫時遊ばしてと、幼子をばたくして、出しやりたり。

さて、夕つ方訪ふ人ありて、しば〳〵呼ぶといへども、答へなきに、其の人は、是非なく歸り行きぬ。隣りなる人、怪しく思ひて、入り見れば、くに子は、蒲團の上に坐し、短劒にて喉をば突きて、血にまみれてありしかば、大に驚きさけびて、人を呼びしに、別室なる一英子も、此の聲を聽きつけ、走り來りたるが、か丶るさまにうちおどろき、直

ちに人を馳て、官に告げ、且つ水よ藥よと奔走して、頻りに呼びたるに、氣息かすかに出でたり。撿吏も來りなどして、事のよしを尋ぬるに、くに子は、何か云はむとしたるが、よくはえ云はず。わづかに、手を合せつゝ、何事も寛典を垂れ給へと、かすかにいふのみ。稚き子も戻り來りしが、此の樣を見るより、すがり歎き、母さまよく〳〵、何して怪我はし給へる。痛からむ、藥はやうつけてよ。父さま。父さま。父さまは、何處にかなど、泣きまどふを、確かと抱き締めて、愛らしの子や、いとほしの子や、常々母の敎へたるやう、父樣兄樣に、おとなしく仕へてやといふを、最期の言の葉。葉末の露の、あはれ敢果なく消え行きしこそ、いとほしかりけれ。

側らに一書のあるを見出して、披き見るに、金圓の紛失は、夫の知れる事には侍らず。實は、妾の業のみ、あしかりしと思ひ悟りて、唯今、われと我が刄にふし、其罪を購ひまつる。願くは、夫を免され、又二人の子に、災ひのかゝらぬことの、いとゞしく願はしさの限りに侍るとのみありしに、田上氏は、其貞節をいたく感じ。憐みて、直ちに其遺書を携へて、官に出で、失ふ所の金は、更に惜しむに足らず。願くは節婦の志操を遂げさせ給へと、一重に願ひけれど、遂に主人は許るされて、歸りたりとぞ。實に、めでたき良妻賢母、時に年三十三、盛りの花の惜しむべき限りならずや。

孝婦れん子

薫風仙史

れん子は箱館のかたほとりなる、名崎村といふところの、長四郎が女なり、人となりて、程近き日の浦といふ里の、清十郎が子なる伊之助といへるに嫁ぎけり、かくていと睦まじう過しつるが、寛政十一年れんが三十四歳の年に、夫伊之助ふと病の床にふしけれど、いたく憂ひて、何くれと落るくまもなく心を盡し手をつくしゝかども、遂に生める男子三人をおきて敢へなくなりにけり、されど身もやつるゝまで悲みなげきつゝ日をおくりけり、家もと貧しくて朝夕の烟だに立かねるが中に、舅なる清十郎は老いて七十七歳になり、はた久しき年ごろ中風の病をわづらひて、腰ぬけて足もたゝぬを、厚く養ひていさゝかも、よからぬ顔をみせず、且二人のをさなごをさへ、女の手一つにはぐゝみつゝ、辛くも年月を過しけり、生の親なる長四郎ははやくみうせて、兄も長四郎といひて、家をつぎたれども、これも極めて貧しくて、力を添ふべくもあらず、さとの近きわたりの人ども、ろの状を見るに忍びずして、いかで齢もまだ晩からぬど後の夫を迎へとりて、相應しき世のたつきをして、この苦をのがれよなど、折にふれてはいひすゝむれども、れんは固くいなみてうけひかず、一度この家に嫁ぎて、三人まで兒をもちて、今いかに貧しかりとて、などてか二夫につかへて貞操をけがさんや、もしろの後の夫心よからずして、舅につかへざらんに、男子の妻を去るとはことに

して、妻の身のいかにして、夫を出し去らん、又からんには老いの舅の爲にいかばかりか不孝ならん、亡き夫の爲に限りなき不貞をし、罪もなき我兒にも、いくばくの辛き目を見せんも知るべからず、これのみはえうべなはじ、ゆるし給ひてよといひて、耳にも止めず、此日浦といふ里は田畑もなくて、里擧りて、荒き濱邊に漁りするをもて產業とす、されどかよわき女の手のなすべきやうもなくて、たゞ日毎に濱に出でゝは、浪の打よせたる昆布などを拾ひ集めて、朝夕の菜とし又は賣りなどもし、春の頃は、路の邊に生出たる、路の薹などをとりて、米粟の代とし、又は海の岸に漂ひよれる枯木古木ともを集めては、薪として炊ぎつつかすかなる煙のもとに、老舅幼兒を養ひて、晝夜いさゝかもその心に違はず、おのが身をも打わすれていたづくさま、よそのみる目もいとあはれなり、されど舅なる長十郎つねに人にかたりけるやう、おのれいかなるゆかりのありてか、かばかり心うるはしき嫁をとりて、老いくづをれて、手足もきかぬ身の、けふを事もなくて、過しぬること、これ何ばかりの幸か過なんや、偏にれんがかげに立ことよとて、よろこぶことかぎりなし、近隣の人々も普くその至孝の志にかまけ合ひて、ほめ稱へざるものはなかりけり、かくて七年が程をへて、文化の二年といふ年に、所の長、場所懸り小川喜太郎に訴へ出ければ、正養府ことのよしを糺して、同じき年の六月二十九日といふに、下野守忠裕朝臣のもとにきこえ上しかば、七月十九日其

のよしを厚くほめたまひて、れんに白銀七枚を賜り、なほ清十郎が養老の料として生涯一人扶持を下し賜ひけり、かつて賜りたる金穀をも少かづゝ近隣に分ち配りて、公恵の忝じけなきをよろこび合ひにけり、さてこれよりも孝養いよゝ深かりきとなん。（休明光記による）

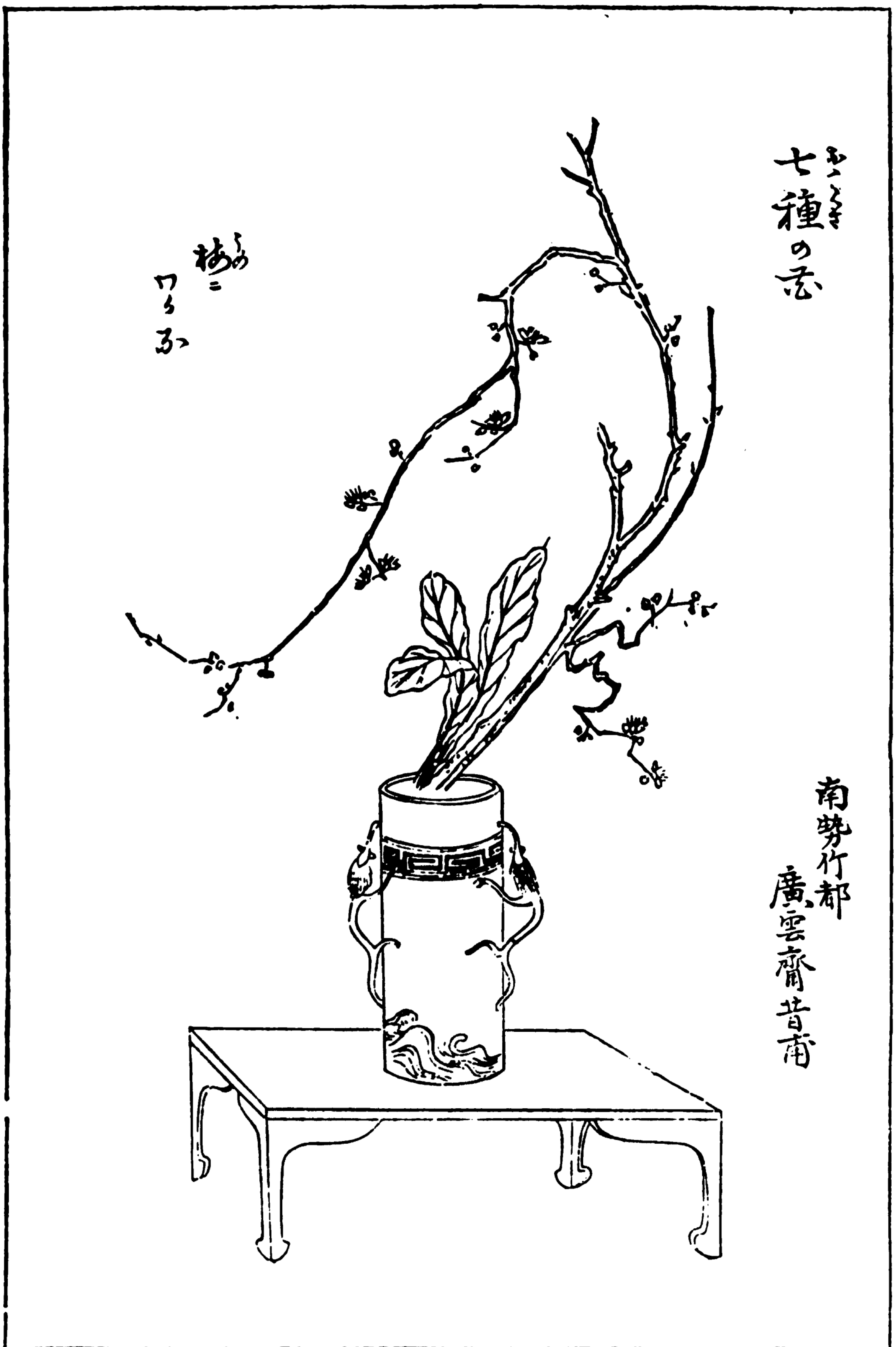
り〱の
つらさぞなにゝ
なげきけん
やがてなきよも
あればありけり

わがせこは
ものなおもひそ
ことしあらば
ひにもみづにも
われなけなくに

家政

いけ花（闘入）（つゞき）

井上頼文


七種の花
梅にワらび
南勢竹都
廣雲齋普甫


上元の集
梅（うめ）
柳（やなぎ）
椿（つばき）
南紀黒江浦
鷹林齋仙甫

活花（第二）

田邊和氣子

池坊流は先づ手はじめに、葉蘭を以て活習ふことなり、此葉蘭の葉には、おのづから陰陽あり、何れも陽の方を以て、前にすべし前にもいへる如く眞。副。體。の寸尺を、大略定めて、これに合せてあしらひを加ふるなり、すべて捻出せず、其葉の恰好によりて、活るをよしとす但し葉に土など付たるは叮嚀にぬぐひてよし、圖の如く五枚を以て二三度活習ひ次に七枚を學ぶべし、かくの如く筆もて其理をかゝげ、又は圖するなどは、いとやすきことながら、其實業にいたりては、わづかに五枚、又は七枚の葉蘭の、葉も莖も忘れず、一時間にて活得ることは、いとかたかりけり、されど其始め、寸尺の見積り、枝葉の恰好など、師の手づから定めて、教へらるゝほどは、さのみかたからぬ様にれもひあなどるもの也、稍進歩するに忘たがひ、獨立して物せむとすれど、中〳〵おもふやうにならざるより、其花其木のあしき故なりなど、うちつぶやき、又は心倦て、今は止なむなどおもふめり、こゝをうちねんじつゝをこたりなく習ひなど、いかでか高きにのぼらざらん、一瓶の花を日毎に活かへておのれと工夫しおのれと考へ給へや

こゝにかゝげたる圖を、よくこゝろをつけて、みたまへかし、


真
副
体
五枚の活かた
七枚の活かた

だいどころ

大和「シチウ」

大和「シチウ」は、西洋「シチウ」に據りて考へたるものにて、其の種は、時々變ることあるべけれど、茲には、折柄の物によりて、其の調へ方を記すべし。さて折柄の種にては、馬鈴薯、人參、玉葱、隱元、茄子の類に、鳥肉若くは牛肉を用ふべし。

右の種の中、馬鈴薯、人參、隱元、茄子の如きは、好き程に切りて、後ち湯で置き、肉と、玉葱とは、橄欖油にて煎り、(成るべく「シチウ」鍋に此油を少し入れ、沸立ちたるを待ち、品物に食鹽少量を振り掛けて、之を鍋の中に投ずべし) 煎り上がりた

る處へ鰹節の煮出し汁を注ぎ、好き程に醤油を加へて、味の加減を爲すべし。其宜敷を見て、冷水にて緩く解きたる葛を掛け、次に前に湯で置きたる野菜物を入れて、十分間位煮るべし。之を盛る器は、成るべく白色の大ぶりなる皿を用ひ、餘り多量に盛らざるを上品とす。

右の種にて油を用ひず（玉葱は除きたるを佳しとす）煮出し汁を多量にして、醤油と食鹽とにて鹽梅を爲し椀盛とするもまたよろし。

黄金豆腐冷奴

先づ鰹節の煮出しをとりて、冷し置き、雞卵を割り攪きまはし、たまご壹個に、煮出しの汁五勺位の割合に入れ、更にかきまはし、之を四角なる器に入れ、蒸籠或は鍋にて蒸し、蒸せたる後、器の

儘、水に浸し、冷ゑたるをまち、器より出し、好き程の大さに切るべし。之を盛るには、成るべく白き色の涼しげなる鉢を用ひ、先づ之に冷水を入れて、後徐かに右の豆腐を入るべし。尤砕きたる氷を、水に混ずれど更に佳しとす。

右に用ふる薬味は青紫蘇、大根オロシ、摺生姜の類を宜しとす。

鱸の洗

鱗を剥き、三枚におろしたるを、縦に中程より切り、皮を去り、好き程に薄く刺身様に切り、うら漉の如き水の通り易き器に盛り、幾度となく、上より冷水を注ぎ掛け、肉のハゼたるを待ち、皿に玻璃籠を置きて、其上に盛り、傍らに、氷を置くべし。「ツマ」には、瓜をホソ引きたるもの、穂紫蘇、山葵、大根オロシの類を用ゐ、醤油又は酢味噌を添ふべし。

煮唐辛

根コギの唐辛の葉及び實を採り、沸湯を注ぎ、醤油に味醂少量を加へたる汁に入れて、之を煮詰め、佃煮の如くなすべし。茶漬の菜などに佳し。

思ひいづる儘

くりや女

（一）（八月中）婦人行事

草深き片田舎に生立ぬれど目に觸れ耳に聞くものみな鄙びたる事のみにて、世にきこゑんもやさしうればゆれど、折ふしの慰みにもとて、今思ひいでぬるまゝを、季節日用調理、即時簡易

治療法、農事のしをり、家禽飼養法などものしぬ、なほ流行の衣類、髪の結ひ方、小道具等も、つぎ〳〵かきこゝろみなんとす、

季節日用調理

(い)新とろゝ、　玉蜀黍の粒を削り落して、これを擂鉢に入れて擂りつぶし、すゐのうにてその粕をとりさるべし、若し水多からば暫らく沈澱せしめて、その上澄を去り、さて白砂糖を和して、糊狀になるまで煮詰め、重箱又は切溜等に入れて、冷却せば、恰かも煉羊羹の如きものとなるなり、老人小兒の爲には、殊に消化宜しくて、滋養分もあれば、よき食物なるべし、

(ろ)わか茄子の調理　この調理をなすには、まづ茄子の中に含む一種の臭味をのぞかんため、一時間あまり清水にひたし置くなり、その法の三つ四つ、

一法、わか茄子の、いまだ青色なるを採りて、皮を剝ぎ、小口切に薄く切りて、あつき湯を注ぐ、さて汁の實となすべし、

二法、まづ冷水に浸し、その外皮を剝ぎて、適宜に切り、玉蜀黍の柔らかなる粉を、まじへて、食鹽にて味をそへて、烹食するも亦可なり、

三法、いまだ熟せずして、青色なるの時、通常の茄子を漬くるが如く、鹽からくつけ、二三ヶ月もしくは五六ヶ月を經て、食すべし、これは、農家日々の菜などにはよろしかるべし、

四法、赤く熟したるを、暫時冷水に浸して、其の外皮を剝ぎ、白砂糖を振り掛くるも、暑中に

は好食物なり、このほか茄子は、肝臓のやまひ、あるは懐血病等には妙功ありとかや、

即時簡易治療

(い)サシコミの時、子供の水泳ぎの際には、ふとサシコミの起ることあり、又雷の激しく鳴揆めき、あるはものに駭きたる時等も、起ることあり、さてその折醫者を呼び來るまでの手當緊要なり、まづ患者の衣服をゆるべ、とりわけ、喉胸の邊をゆるやかにし、前半身をすこしく高めて、平らかに臥さしめ、一杯ばかりの水、一二分間ごとに與へ、七八杯にいたれば、体温おのづから復すべし、そのころを見計らひ、アルコール性のもの少許を與ふべし、もし醫者の來るにひま取るときなどは、フランネルのきれを熱湯にひたしたるものか、さなくば徳利に湯を入れしものか、あるは温こんにやくか、いり糠等、何にても手近く得易きものにて、胃部俗に胸先又はミヅオチと稱する所を、暖むべし、

農事しをり

上旬、春葱、大葱、寒百合等植かふべし、

中旬、甘藍、葱頭、萩そ豆等の播種は、來月までよろし、

下旬、秋蘿蔔、花菜菔、たうちしや、蕪菁、紫雲英等蒔くべし、紫雲英は、田の草除の後に、まくもよかるべし、

家禽飼養

(い)この月は、卵を産むこと、少なく、ほとんど

産せざるに至る、ろの時は、餌の組立上に變換をなし、特に、卵を産むを促す性あるからす麥をぞ、多く　用ゐずして、滋養ある大麥を、多く與ふべし

(ろ)この月に産みたる卵は、多くは孚化せず、されど久しく保存し得るが故に、能く冬まで貯藏するに適せり、

(は)冬になりて家禽をかふべき荒地をすき起して、少しの油菜を播くべし、但しあまり厚く蒔くはよからず、

ろへごと

米飯のカツレツ、夏は、食事のすゝまぬものなれぞ、調理をなす人　、こゝろして、さまぐ\に料理の法をかへて、膳に供すべし、いま米飯の調理法を記るさんに、炎暑中、殘り飯の腐る恐れあるものなとをぞ、少量の鹽か砂糖か、嗜好に適ふものを入れ、梅の實ほぞの大いさに丸め、之に卵の黄味を塗りつけ、カツレツの粉又はパンの屑粉にまぶり、之をうしの油か、胡麻油又は豕の油か、いづれにても上ぐるなり、但し、カツレツの粉は、パンの固くなりたるものを、砕けぞ、手製にて出來得べし、魚のカツレツ等も此法にてたやすかるべし

禍は口より出て、
病は口より入る、

漫錄

救急英斷

小山田與清

將帥陣に臨では、君の命をも受ざる所ありといへるは、戰には臨機應變の處置ありて、君命を待つ間に、敵不側に出て、襲ひ來らんには、敗を取るのみならず、身をも國をも亡さゞる事あらんや、戰陣のみに限らず、王事に處したらんとき、救急の烈しきに臨では、命を請許さるゝに及むざる事あり、今より六十年許の昔にやありけん、美濃國洪水の災ありし時、民家流溺し、田地流出せるを、縣令なりけん、他職なりけん、鈴木某そこにありて、河堤を斷て湛水を決流し、鄰國の侯家に乞て、人民の溺れ苦み、飢疲れたるを救養しに、議者説を興し、官に請許されずして、自由の所爲のよしいひかたぶけつれど、官その英斷をもて民を救ひ、田地を全せるを稱擧したまひ、褒裝の御賜ありしとなん、また出羽國村山郡の民、數万人蜂起して、愁訴せし時、縣令の下吏市村某、一人身を抛て、鎗棒長太刀などの群に趣き、遂に説諭し得て、これを治めたるに、同僚妬心を生し、自由の振舞のよしいひしらひて、其大功を拉んとせしかども、遂には官にもきこしめし及むせたまひ、執政吉田の侍從の殿の擧にあづかりて、登用せられき、これら身を惜む臆病者の成し得べきわざにあらず、一とせ府下大火のをり、或藩邸の士、裏門を守りたるに、火迫り來てせんかたなきまゝ、女房婢兒

の類、こゝに馳せ集り、逃出んとせしを、守門の吏愚直固陋を取て、達官の命なき間はひらかじと拒みけれど、門内にて許多の女兒命をれとせりとなん、こは己が身を厭ひ、達官の命を固守し、應變の才なき愚直の所爲といふべし、野客叢書に、後漢の橋玄、涼州の刺史たりし時、諸郡飢餓せるを、官倉を開きてこれを救はしむ、倉廩に主たる者、舊典に先請許さるべきよしあるをもて、固守の説を立てしに、橋玄曰く、若しこれを請許されんには、民先飢死なんとて、賑給し訖てこれを奏せるに、汲黯か河南の倉の粟を發して、飢民を救へる心におなじとて、稱譽せられ、齊の相に轉任されしよしも見ゆ、隨書の張須陀が傳に大業中齊郡の丞となれるに、遼東の役に百姓業を失ひ、又歳飢餓につきて穀米を踊貴す、張須陀將に郡倉を開て賑給せんとす、官屬咸曰く須く詔勅を待つべし、擅に與ふべからず、張須陀曰く、今帝遠きにあり、使を遣すとも往來必ず歳序の淹にあはん、百姓倒懸の急もし報の至るを待たば、當に溝壑に委に至らん、吾もし此をもて罪を得ば恨る所なしとて、倉を開て而後狀を上すに帝これを知て責ず、ともあり、かゝる期に臨では、俗にいふごとく、腹を突出し、自盡して、犯狀を謝すべく決斷せざれど、應變の功は立がたし、魏勃が曰く、失火の家豈暇ありて大人に言して後火を救はんや云々、此外李唐の員半千韓思彦の輩累世かぞへつくすべからず。

家事の治不治

小山田與清

家事の治不治を以て人を議するは然ることなれど、さては拔群の士を抽用すること難し、蘇秦、漢高、韓信、陳平などのたぐひ、いづれも放蕩無頼の子にて、臭名なきにもあらねど、其世に顯はれ、明主に抽用せられし時は、豪傑ならざる事なし、列子に鄭の子產國の政を執事三年、善者は其化に服し、惡者は其禁を畏る、鄭の國能治り、諸侯これを憚る、然れども兄の公孫朝酒を好み、弟の公孫穆色を好て、家亂れたるを治事能はざりしよし見ゆ、ろも〳〵過て改に憚ざるは人心なり、豪俗秀才は何に用ても人にすぐれたる功を立るものゆゑ、家事亂たり、臭汚の行ありとて、これを捨たらんには、良士出づべきこと難し、古の聖賢は云らず、後世の人品をもて論ずれど、律義に家を守るは、俗にいはゆる沈香も燒かず屁も放ずといへる類にて、臨機應變の才なく、物の用に立がたし、周處が三害を除て歸正せるが如く、放蕩無頼の子といへども、其性善ならんには改心の豪傑忠良なしといふべからず、然れども栴檀は二葉よりかうばしく、三歳兒の魂百歳まで通ることわりにて、自才の善惡見ゆるものなれど、識別して登用すべきことにこそ。

香のきゝやう　附たり名香の名

なにがし

香をきくなど、さる風雅たる、はた、せいたくめいたることは、なにがしなどの、かりそめにだに知ることならず。されど、こゝに識せるも、

なにがしがまさぐりたる、ある書のなかより抄きいだしたるにて、その正しきやいなやは、なにがしが、深くれふところの責任ならず。

香をきく時は、座上より聞て、一通とほりて、さて香ぬし、炷きたる主のかたへ來たり、またおし返して、一通とほす、すべて何時も二度つゝ通はすことなり、されど人數十人より上の時は、一通にておくべし。

香をきくに、左の指三つは香爐の底にし、人さし指ひとつを脇にはづるゝやうに持つべし。

香をきく時、香爐を前に引かたぶくべからず、銀盤も時によりてはしる物なり、香炉をかたぶけぬれば、香も銀もこけすべり、灰へいるもの也。

鼻息あらくきゝ、手にてかをりを招きかけなどすべからず。

香炉わが方へきたりたる時は、次の人へ禮義してきくべし。

花見あそびの比などにて、椽にあるとも香をきく時は、内に入りてきくべし、風をいむ故なり。座にて扇つかふべからず。殊に煙酒を禁ず。

香きく時、龍涎香、春日野の類をたくをりは、銀盤をとりかへておくべし。他香の匂名香にうつりて、惡しくきこゆればなり。

香を人に望みてたかすに、一焼されたきなどいふはわろし、一炷といふべし。

香炉に火とりて、底へ火氣つよく通り、あつき時は、奇麗なる物に水をいれて、香炉を三分ばかりいれひやすべし。

盆にすわりたる香炉は、左の手にて盆をもちて、右の手にて香炉をとらへて、座敷へいづるなり、座中にて、ゐながら請取わたすは、盆ながられしまはして、出るなり。歩むとき香炉をとらへざれど、すべるなり。盆ぬり物ゆゑなり。

香炉を貴人にまゐらす時は、左の手にすゑ、右の手を底にわたるやうにして、いかにも愼しみて參らすべし。貴人は右の手にて、香炉の上を提ぐるやうにして取るなり。

同輩の人へは、左の手にすゑて、右の手を香炉の中ほどの脇に、指さきをろへ出すなり。

下輩へは、香炉の上を片手にて、提ぐるやうにもちて、底をうけとらすなり。

香爐に火をとる時、灰をわたゝむるには、火をいれろの上に灰をかけて、また別の火をおいて、少しわたゝめ、さて取りいだして、別の火を前の穴へ切目を上にして、入れてかげんよき時、灰をかけれすなり。

香炉の火よわくなる時は、香箸にて上に穴をつきわけて、その穴の上に銀を置きて、炷くべし。ろれにても、火よはくど香を一炷わなの中へたてにいれて、ろれにて火をはうずるり。亦火つよすぐる時は、香を銀のまん中に置かず、片隅にれくべし。

空だきは、銀をれかぬなり。

香合には、空たきの沈香、五切いるゝなり。沈の寸は長三分、幅二分、厚一分なり。

火をとりたる香炉を、盆に据うるに、香炉の底を

さぐりて、あつくむ、盆にすうべからず。盆にあとつけむなり。

火加減は、初はすこしつよく、取りて、眞那班などの悪き香をたきて、火あひよくなりたる時、よき香をたくなり。初より火あひぬるきはわるし。銀をおきて、銀の上に指をあてゝ、見るに、あつくて指をひく程なるがよし、それも指をあてゝ、すぐに引く程なるはつよし、香をつかぬ先に、きて顔にほのりと火氣あたる程がよし。

盆に香炉、香合をおき。香箸は、先をその間へゆくやうに置くなり。又二つの間に直にもおくなり。焼きてのちは、左のかたより、香爐香合の間へおく、又はじめは香箸を手に持ちて、出るもよし。あるは香合を左、箸を右におくべし。三ツのかなわの心なり。焼香の時は、一ツ所におくなり。

薫物は、包みて香爐のふたにおきて、出しても、よき薫物たきてあとに沈香伽羅、たくべからず。

香炉を人の方へいだし、または板香盆などにすゑて置くときは、おもてへ香炉の足を、二ツむけておくなり、上中下の人に渡すをりも、かくのごとし。

伽羅の名

東大寺　蘭奢待　逍遥　法華經　三吉野
紅塵　園城寺　似　般若　黛
楊貴妃　玄宗　青梅　月　龍田
法華　老梅　八重垣　丹霞　紅
薄紅　薄雲　上馬　八重菊　芙蓉
山陰　縮　十九　芳村　奈良芝

帶　子糸　若菜

新伽羅の類

富士煙　花形見　伯瀨　薄紅葉　富士
難波　武藏野

羅國の類

古木　八橋　月良　菖蒲　端午
鷲　二葉　松根　眞鷓　沈外

眞那班の類

中川　白梅　闌子　寒梅　早梅
寢覺　七夕　須磨　明石　雁金
假寢

眞那賀の類

盧橘　夕時雨　野分　日影花　維
有明　花宴

名香の類

夕時雨　大井川　新樹　若菜　初菊
手向　探梅　清香　玄　浮島
冬野　澪漣　花散里　男山　なこ江の
青　朝氣花　大ぬさ　古川　紅葉賀
春濱　川浪　青葉　楫枕　浮舟
橋姫　荷葉　横笛　いさ枕　人冬
冬　柳　硯　幾代　菊
三笠　小倉　最中　樗　松の戸
野の宮　神樂　立舞袖　横雲　藥玉
五月雨　長柄橋　逢坂　夕霧　唐衣
籬　苅萱　夕暮　小春　手枕
余波　轉寢　初鴈　釵　柴山
初雪　蒭枕　十六夜　青山　梅風

忍　穐風理　寒山夕樓
寒草陵波雪江　竹馬篠目
晩花竹葉桂嵐　風紫樂早苗
漏月柳花春宵　霜夜蹈歌
湖氷春水海棠　初音雨夜
濱楸葵　御船山　私語尾上
丹楓唐絹萬代　曙埋木
木下夏箕川一聲　鈴鹿五更
迷月玉章新三吉野　石帶片糸

いふむかりわらまし、

ときしらぬ山は富士の根
いつとてかかのこまたらに
ゆきのふるらん

不忍池の蓮

ちわき

忍が岡のふもとに、水たまる池あり。名を不忍といふ。ひがしの比叡のもとにしあれど、み國ぶりこのむをのこらは、比良のおほわだなすといひ、漢まなびするやからは、中嶋のけしきより、ながき堤つきて、石橋をわたせるさまなどの、漢土の西湖に似かよふとて、小西湖とぞよぶなる。そは、ともあれかくもあれ。めぐり一里にあまり、はたむり七八町もあらむ池のおもに、蓮のひろごりみちたるなむ、唐にも、やまとにも、はた、西の國にも、たぐひあらざるべき。ことし八月それの日、朝まだきにゆきて見る。しぬのめの天やう〳〵あかくなりて、朝霧はれそめしひまより、あかき花の、三

ツよツ二ツと、ろここゝに見ねしが、ねならぬかをり吹きおくる朝風につれてたちこめたる、霧のはれわたりしころは、池のおもをなべて、さながら、紅のゆはだえきつめたらむやうにて、見るめまばゆきばかりなり。わかきをとこ、をみなたちの、打つれだちて、すわしに草ふみわけ、朝露をひらふは、脚のやまひあるなるべく、中嶋のみぎはの、石に、えりすゑて、思ふこ



とありげに、たむだき、うなじたるおきなは、花のひらく音きかむとのすきにや。はた、歌よびいでむとの風流にやと、いとをかし。そがかたへに、二十ぢかりのをのこの、おなじさまして、をりをり打うなづくは、里のかへりが、昨夜のゆめくりかへすならむと、すこし、にくき心ちす。天女のみ堂に、なまめける女のねぎごとするは、何をもとむるならむ。きかまほしくて、ゆかしく、はた、心にくし。茶うる家にたちよりて、あぐらに去りすゑ、打やすらふ。ほかにも人ありて、こわだかにいひのゝじれど、なにぞと見やるに、むくつけき髯をとこ、法師の袖をとらへて、佛は、この華をしも、上品のうてなといへど、露を玉ともあざむけど、さしもけうらの物として、あながちにたのむべきならず。まして、風にゆらぎて、露のちるを見れど、佛とて、足ぐみて、のどにやすらふべくもあらじ。されど、さるみ國まなびする人の、極樂といふところにゆきたらむには、水泳こそ一のわざなるべけれといひし事、理なからじやは。

不忍の池のはちすの花さかり
　日のいるくにの佛わわつな

といひてぞめけど、法師、いとふくれたる面つきして、さにはあらず。蓮こそ、み佛のめでたまふものにてなか〳〵にたふとけれ。

はちすこそ花さへ葉さへそのみさへ
　はたや根さへもめでたかりけれ

と、うちかへしたり。髯をとこ、また、その實さへ根さへとは、法師の身にふさはず。あまそふく

つけくて、はしたなからずやは。といひて、わらひどよめく。ざれたる人もあるもの哉。法師のこうじ面もをかしやと、われもうちゑみたり。

久太郎後室の女訓

それがし

世に久太郎後室といへるは、本多美濃守忠政の女にて、家康公養女となして堀越後守忠俊に嫁せたり。すこぶる賢明淑德のきこえあり。後、忠俊罪をえて流刑におひしより、貞節をまもりてありけるが、その頃、寛永年中、水戸黄門賴房卿の一の姫君の五歳なるを、將軍家光公の養女として、加賀の筑前守光高へ入輿のことあるにわたりて、この姫君のかしづきに、正しき上臈をとて、かれこれ詮議のうへ、この後室こそとて、一万石の扶持にて召出されたり。この後室つね〴〵、姫君にかしづきの上臈たちを、諭したる訓誡あり。そのことゞも、たゞに、昔の奥女中が心えたるのみならず。また、今のよの孃たちが心えとなるふし〴〵、すくなからずと思はるれど、左に抄錄してかゝげぬ。

女の高聲高笑は、はした者めきて、きらふことなり。奥むきは、物しづかなるがよろし。女の物語れるは、なにとなく、かまびすしきものなり。ひとり〴〵が愼めど、さゝやきわたして事すむべし。互に、聲しづかに姫君をかしづき奉るべし。さゝやくとて、耳に口よせはなさるゝは、人の噂やのたまふと、一座のものも心おかれて、よろしから

ず。是を耳雑談などいひて、きらふことなり。慎まるべし。また、化粧し、油つくるがよきとて、白粉のおもてにさらめき、髮の油しみて匂ふなど、下司のやうにてわろし。近江の君が、紅粉わからかにかいつけと、源氏にわらひてかけるも、まことに古今おなじ心なり。かならず、さは墨くろく、化粧どはのきら〳〵となきやうにこそ、いたさるべけれ。髮は伽羅たきかくれど、自然とろの油うつりて、しなやかになるものぞかし。すべて、御厨子、黒棚は、かならず、上壇の床にかかる、十二の間にも心次第なり。むかしは、み厨子は御膳棚なりき。いづれの時より、床のかざりには用ゐたりけむ。奥の床には、御琴の類、冠棚をも置れて、草紙など載せらるゝことなり。料紙、硯箱

うはさしの包は、古代より姫君の調度なり、故に、床飾にはせられたるべし。御丁臺の總角は、かざりにしたる物とればすらむが、是は、御姫娘のとき、御養生にいることぞかし。掛盤にむかひて物まゐるを見るに、かしこまりては居ぬものぞ。掛盤の料理は、古代の法式あるなり。常に御前に伺公し、または、晴なる座へいでゝは、左の手を、爪先をうちへ我方にして片手つき、かほを下げてをり、裾ながく引きたるがよろし。今の人人のゐずまひ、かいどりの様子は、田舍風なり。姫君などのならはしにあらず。物くらふとて、箸の先、五分とはぬらさぬ物ぞ。五口三、七五三、每度、れん祝御膳のときは、たゞ、湯漬をもちゐて、菜には手をつけぬことなり。掛盤の配膳は、むかう

のつば形より、左の手をいれて、右の手にてふちをとり、左の肘にて腰卷を押へて給仕したまへ。長柄銚子などの上臈は、お介添、むかふ箸にまゐるゆゑに、時々に入るべきま〻、日頃稽古あるべし。色紙へ歌よみてか〻ざる事は、まをすまでもなけれど、女は、短冊とても、男のやうにはか〻ざることなり。文なども、ちらし書など、わがま〻にころ見ゆれ。出船、入船、蘆の葉、村雨、山嵐、歸花など、定まりたる書法ならうて、ちらされよ。白小袖三ッ襟などいひて、時をり〳〵の衣裳あるゆゑ、姫君の呉服、その心にて支度あるべし。皆の衆の、うは着のきよらめきて、間着のよろしからざるは、心見ゑてわろし。間着はよろしくて、上着のれとりたるはよし。されど、結構には嗜まれまじ。ほど〳〵によりて、とりかへても着られよかし。さて、女は物を氣にかくる癖あるものなり。たしなめど、何事も氣にか〻らぬものなり。妬うらみといふも、皆物をきにかくるよりいづ。男とちがひて、詞のあやまちを咎ぬものなり。心にさはりたることをも、堪忍するが女の操なり。いかにも輕きうちに、物ごと洗ひながして見よ。心にか〻ることなし。われ、むかし、發明したることあり。わか〻りし時、慶長のすゑ、越後くづれの年、初郭公を、閑處にゐて、左の耳にて聞きたりしが、俗に凶事なりといふ。なまじひに耳にとまりて、心うく思ひしが、その夏、わが夫、最上へれ預になりたまひき。また、去年の夏に、厠にて、また左の耳にき〻たれど、今はか〻る身なれど、な

にか心にかくることあらむ。定めて命をはるべきにころ。願ふところなりとて、露も氣にかからざりき。かくまで、思ひ捨てたる身なれども、召出されまゐらせて、かしづかれまうせむ、耳には善惡なく、時鳥に吉凶なし。唯心のおもむく所によれむ、なにごとも、心にかけ給ふな。

花ふゞき

鹽井雨江

その二十

紫雲ふたゝび九重の上にたなびき、天日、又明に榮ゑむとしたる建武中興の世、悲しいかな、足利のむら雲、嫉むべき足利のむら雲さやぎ出でゝ、天下は、又ぬば玉の闇黒塲裡となりて、百鬼横行し、腥風血雨、限りなき悲酸をきはめ、王師えむ〳〵進み、えむ〳〵振はず、勤王の將士頻りに起り、頻りに亡び、三木一草といはれたる忠臣も、一は阿蘇山上の月と入り、一は揚梅東洞院の花と散りてかへらず、一は湊川渡頭の水ときゆ、一は大宮大手の露と消ゑて殘らず。朝風暮雨、世はものすごく、心細くぞなりまさりける。

一の宮は、南海の客裡に、久しく戀しう夢みたまひたる都の住居都の人に、恙なくてあひたまひたる喜びのれん物語りも、長閑にかたらひ玉ふおん暇なく、親しく御太刀を取らせたまひて、東夷征討にむかはせられ、遙に越前の金ヶ崎に、れん駒をとゞめられ、ふたゝび都を風雲の外にながめ玉

ふ、事となり玉ふ、御身の上ぞあはれなる。そ
れも、いたましきおん有樣、これは、またいた
ましき限りなる御息所は、二度は離れじ捨てじと
思し召したる堀河の御坐所を、ふたゝび離れでは
叶はず、捨てゞは叶はぬなん身の上とならせられ、
また踏みわくべくもればさざりける深草のむかし
の露、又更に踏みわけまどふ事となり、おなじ音
に色に、いつか又きくべくも見るべくもおぼさゞ
りける古の杉の板屋の松風蘿月、またも、おなじ
袖に、忍びわび玉ふべき御身の上となりたまへど、
ものもまゐらず、いねもねたまはず、身を抛ち、も
がきてのみ、歎きかなしみ玉ひ、賤機が心を盡く
し、身を砕き、慰めまゐらする言葉も業も、更に、
その甲斐なく、はては、物狂はしきまでに歎き玉
ふ。

斯くては、心もとなや、御命にも障り侍べらむに
と、泣きて諫めまゐらすれど、かゝる世の中に、い
つまで誰が住まむと思ふべき、命はやうならど、本
望ぞやと、常になく、うち笑みて、なかなかに聽
き入れ玉ふ氣色もなし。賤機は、いよいよ眞面目
となりて、さては、姫上。れん身の上は、誰が爲
めのれん命とおぼすぞ。いつかはと、主上も宮も、
彼方此方に、思ひ頼みてればさむに、おん身を、獨
り親らと、はやうし玉ふが、誠に候やと、道理
を云へど、されど、賤機。吉野にまれ、金ヶ崎
とやらむにもあれ、自らを案内せよ。自らも、主
上や宮に、今生のれんいとまたまはりて、兎も角
もならむずる願ひ。さるからに、かねても消やさ

むと思ふ露の玉の緒の、斯くは消えがてに、けふまでもありたるなれ。のう賤機、よしや女子とて、人のゆく所、人の爲す業をば、何とやらとは、汝がつね〴〵いふ事ならずや。あゝ人の汝れの行かむ所、ゆかじとはえ思はじ。案内せよ、賤機。やよいかにと、わりなくのたまふ。

とき盡くし、語り盡くし、最早慰めまつるべき道さへ術さへ、絶えてなく、さすがに、賤機が屈せぬ心も、今は困うじはつるものから、又斯くては、所詮御命は危く、一日をもおぼつかなくおもはるれば、よしや、宮と共におはさずとも、金ケ崎とやらむにあらば、又、おん心の落着き玉ふ方もあらむかとおぼゆるを、唯一筋のたのみの綱、つなぐ我玉の緒のあらむ限りは、何處までもと、意を決し、さらば姫上、上がかばかり切なるおん悲歎、よそに過ぐさせ奉るも、いと勿體なく、また遙かなる宮の御空も、心に懸らざる朝夕も侍らざれば、これより彼處のわたりへ御伴ひまゐらせむ。さはいへ、武文は既にあらず、七郎殿はあれど、宮に從ひたまひて、彼處にあり。三郎が遺したる郎黨も、又使をたまはりて、彼處へむかひぬ。妾の外に、姫上のおん路次を守り奉る者なきが、心細く候といへば、姫はいなとよ、賤機だにあれば、親らが路次の守護りは、事足れり、汝が力に及ばぬ難義なれば、誰か又よく救ふものありともおぼえず、汝れと二人りのみが、なか〳〵に、人目にたゝで、忍ぶに便りよきものを、疾くゆかむと、いさみて促したまへば、賤機も今更にためらふべき





にあらねど、何時までをとも期しがたき杉の板戸を、おぼつかなくもさし固めて、馴るゝともなしに、いつしか住み馴れたる杉の庵を出んとすれど、俄にさつと吹き下す山風に、門の若木の櫻のはら〳〵と亂れて主從の袂に散りかゝりたり、自ら人の行末を語るかあらぬか。

いぬる年、深草を迷ひ出でたるは、秋の暮。風霧たちさやぎ、白露ちりまどひ、客窓の夜雨に、賓雁の鳴く音、ものゝ哀れの、いとゞ身にしむ頃なりしと雖も、けふのあはれに比べては、なほ昔は腸を寸斷するに至らざりけむ。けふは、げに春彌生の初め、煙霞は、ほの〴〵と空に立ちわたり、紅綠は、はなやかに野山に咲きにほひ、孤雁また喜しげに、故郷の濱へ急ぐ頃、四方の風光のどやかに、秋色の寥落に似ざるといへども、霞や誰が爲めに靡き、花や誰が爲めに笑む、畢竟うら〳〵と靡く霞も、ほの〴〵と笑ふ花も、何れも皆我が心のものに似ず、我が爲めの物に非ず。なか〳〵に、我身の零落、わが心の寂寥を、いやましに思ひろはしむる風光物色のみ。殊に歸雁、故郷へ歸るときく孤雁の影、余や他郷へ急く旅の袖、思ひあはさど、うらやましさは、いかならむ。悲しさは、いかはかりぞ。けふの春色の、主從が心をいたましむる事、必ずや、昨日の秋光にも勝さりて深かゝらむ。去ぞしは、御息所もれん言葉なく、賤機も物いはず、唯姫の御手を取りて、たどりゆけど、大津もうつゝに過ぎにけり。

それよりは、ながらの山の名にたむけ、あふ坂山

に幣祭り、思はざりけるきぬ川や、よろにもすできき和爾の里、嵐にまかす木戸の宿、心細くもいつかすぎ、ゆき〳〵て、漸くに越前へ入りたるに、此處彼處に、足利家の軍勢、關を構へて、なほざりに過るを許るさぬのみならず、よからぬ振舞さへあるときゝけれど、殊更に路なき山にわけ入りて、金ヶ崎と敎へられたる方を志して、岩根をたどりたるに、路や迷ひけむ、ゆけどゆけど、遂に思ふ所へ出でぬなりけり。

可憐孃

中尾鶯夢

(三)　村落の花嫁

逗子の里より、程遠からぬ所に、一つの村あり。軒端數多からねど、百姓の氣樂さは、富めるとにもあらず、貧しきとにもあらで、何不自由なく、隴畝の間に立働く遑は、家庭の和樂に、識らず〳〵、いつしか、鬢邊に霜を帶びて、墓畔に歩を運ぶならめ。

さても、この村に、井本大吉となんいへる、豪農ありける。この大吉、天性情深く俠義に富みしかど、召使の者をも、おのづと、主人の爲を計りて、德は、やがて、全村に普く。その威權は、村長をも凌ぎしかど、少しも驕り矜ぶらず、ます〳〵、謙遜りしかど、誰とて靡き服はぬ者、無かりける。大吉の妻を、お菊といひて、今より數年以前に、大吉に嫁ぎしが、素性賤しからず、標致も立優れて、鄙びたる田舎育に似げなく、高尚き裡に、愛嬌を

備へ、温順なる質なれど、慈愍の契濃く、その睦み親しむ狀、またと比儔あらじかし。よく貞操の道を盡して、夫に仕へ、召使を憐み。あはれ井本家の大黑柱ぞと、謠はれけり。

されど、盈れば虧くる、世の樣や、大吉夫婦の中に、鎹鑰とも謂ふべく、家の寶とも謂ふべき、子といふものなかりける。夫婦は、絶えず、こを憂ひ悲しみて、今日此頃、夫婦は、もはら神佛の加護を祈り、慈善の業に、心を潜めしが。その年の暮近く、煤掃ふ音、遠近に聞ゆる頃、妻のお菊は、懷孕なし。明くれど春の日閑なる、花咲ひ鳥媚ぶる裡に、岩田帶の祝賀恙なく、月滿ちて、玉の樣なる嬰兒をぞ、產みにける。

文林

鵜川　　諏訪　忠元

篝火のおほきをみれどながらがは
　　鵜ぶねの幸のある夜なるらん

川上螢　　仝

宇治川やよせてはかへす浪の上を
　　かげみだれても飛ほたるかな

水雞　　前田　利嗣

さよふけて水雞のたゝく窓の戸に
　　さすかげすゞし夏の夜のつき

河夕立　　佐々木高行

柴舟のゆくへをおひてすぎにけり
八十うぢ川のゆふだちのあめ

河夏月　　永石　德文

夏の日のあつさ流れてゆくみづの
なみ間にやどるゆふ月よかな

常盤御前　　菊池　眞澄

たまぼこのまことの道をふり埋む
雪のうへみちゆくも子のため

社頭祝　　宇野　豐道

幾千代を杉のこずゑにあらはして
いよゝ榮ゆくみわのかみがき

琴　　三輪　義方

あく世なき聲にもある哉月ゆきの
をり〳〵毎にかはるしらべは

夏雲　　槻原　愛子

山はみなふもとになりぬ夕だちの
くものなしたる峯たかくして

夏風　　鍋島　榮子

蟬の羽のそでにあまりて涼しきは
れははしわたるかものかは風

晴後遠望　　前田　朗子

あまくもはいつしか晴れて海の原
ゆふ日うつろふおきのしま山

樹陰螢　　日野西　廣子

しげりあふ靑葉をぐらき庭なれど
くれぬさきより飛ぶほたる哉

梅雨晴　　小池　道子

さみだれのはれたる空の朝づく日

いでゝあふがぬ人なかりけり

夏鐘　松平　健子

短夜はれきうきまでにひとりねも
なほうらめしきあかつきの鐘

市中梅雨　山田　稲子

さみだれのはれま待ゑてあさ市に
つどへる人のれほくもある哉

田蛙　奥山　照子

打むれてわが門田にもことのはの
種まけとてやかはづなるらん

臺灣の島人に示す詞

田中　竹野

あはれ臺灣の島人よ、汝等ぞかり、世に幸福多く、光榮あるものはあらじ、百八十と國はあれども、敷島のこれの大和に、ます國はあらじと、本居翁のよまれしが如く、實に吾日本はしも、いともたふとき神國にして、あだし國々は、やがて皆吾御末になんありける、されど此度、畏くも天皇の、高き貴き大御心もて、朝鮮國の獨立を助け給はむと、ねじけたる支那の、禮なき事共を、せめ給ひ、國の浪風打靜めて、東洋の平和を謀り給はんと、あけくれにれほさせ給ふ、大御心も、しらに、いよ〳〵なめき事のみ言ひ募り、うたゝあだなすをもて、今は筆にも口にもいひ說くべきにあらず、やむをゑず、數多の武夫に仰せてろが非事をせめろがまがれるふし〴〵をためんと、しこの醜草打拂ひ、打きためて、天皇の大御心を、世にあか

し給ふ、誠に仁義の大御軍とこそ申べけれ、されど惟神なる、吾御軍はしも、名義正しき戰にして神の御心にしあれど、海が陸がに戰へど勝ちせむれど取ることを見て邪は正に勝ちがたしとやさとりけん、各も〱おぢ恐れて、朝日の御旗に打なびき、まつろひ來て、わがなひ代と、汝が島を奉りて、二つなき誠の心をあかしぬ、かれこゝをもて、わが天皇は廣き厚き大御心もて、こを許し給ひ、數多の土地をさへ返し給ひぬ、まことにこよなきありがたき事になん、あはれ臺灣の島人よ、こをあだになきゝそ、今よりは立こめし八重のまが雲も、打はれて、年久にあつかひなやめられし、支那のきづなは打たれて、身にまとへる曇もはれ恰も梅花の霜雪をしのぎて、春風に逢ひたらんが如くならん、さて、世にはまれある御國の民となりて、顯津御神の惠にうるははんこそ、まことに幸福なる島人とはいふべけれ、さるをいかなれど、かく大君の高き貴き御恩賴に答へ奉らむともせで、猶非事のみうたゝ募りつゝ、あるは黨を結び、或は共和の政事など稱へて、朝廷にい向ひ、吾大御使に敵なす、あはれ島人よ、今よりは天皇の御言かしこみて、朝廷にまめ〱しく仕奉りつゝ、國民のまことを盡せかし、ゆめあだになおもひそ、吾大君の高き貴き御稜威を、

惜別

永石德文

かりそめにあひてだに、別るゝはいと惜しきもの

なるを、まして七年八年がほど、起きふしを共にし、一日もはなるまじき友の、けふなん立別れゆく、などかはかなしからざらん、身こそ二つなれ心はたゞ、一つにてうれしといひては互によろこび、かなしといひてはともにいたみ、朝には文のことわりをあげつらひ、夕には道のおくをも語らひ、春立てど手たづさへて花の下かげに杖をひき、秋くれどさやけき月かげに舟をうかべ、かすみにきりに、たゞかげと形のごとくこそありしか、されど今はおさらずてこそ、さて親子兄弟の中だにも朝に生れて、夕には海山遥けくへだてはなるゝもの、なきにしもあらず、さるをこの久しき年ごろを、かばかりわりなくすぐしきつること、いかばかりなるふかきゆかりありてにかあらん、今分るゝにつけ、何くれと心に浮び出でゝ、涙さへせきあへずはふり落つるを、から人のますらをも涙なきにはあらずといひけんをと、面かきつくろへど、なほ我身の半をもぎ取らるゝ心地のみしてなん、

雜報

●両陛下御製謡曲

両陛下の謡曲を御製あらせられ給ひつとは先きにほのかに承りはべりしに、今さる新聞紙をみれど、

御製謡曲　成歡驛

ろも水無月の其はじめ、京城内に日のはたを、押立ろめて我兵の、みち遠けれど勇みつゝ、敵のありかをさぐらんと、斥候の兵を出しても、心せくなり日はくれて、くらさはくらしやみの夜を、たどりながらにすゝみゆき、安城渡しを打渡たり、數万の敵の守るをも、ものゝ數ともなさずして、せめよく〳〵とよせゝりて、成歡驛の砲壘を、打破りつゝ牙山營、はやのりとりて日の本の、武勇は四方にかゞやけり、武勇は四方にかゞやけり、

皇后宮陛下御製謠曲　平壤

ツロク　ころは明治の二十七年、長月なかば、諸軍勢、大同江の急流も、唯時の間に打わたり、平壤城に近づけば、砲壘あまたきづきたて、傑字奉軍毅字軍や、其外諸軍すきまなく、隊をみださず守りしを、我忠勇のつはものは、砲煙彈雨を物とせず「すゝめ〳〵といさみゆき、」おもてもふらず攻たつる、あまたの敵もふせぎかね、秋の木の葉とみだれたち、煙のうちに散りうせぬ、とりでのうへに日の御旗、高くかゝげてすめらぎの、御代萬歲とうたふなり、御代萬歲とうたふなり。

あなかしこ

●帝國敎育大會の決議　去月、京都にて開かれたりときゝつる帝國敎育大會にて、決議せられたりといふが中に、ねうとある節をぬき出でゝかゝぐれば、

問題

(一)小學校の兒童へ尙武の氣象と艱難に堪ふるの體力を養成せんには如何なる方法を設く

べきや

(二)小學生徒氣風養成上學校に於て殊に注意實施を要する件取調の議

右の二問題に對する決議は左の如し

(一)古來武士の武術を練習せし實歷陸海軍人勤務上の艱難等に關し談話をなし及び征淸軍戰死者の効勞を表彰する事

(二)小學校所在地管の聯隊旗に關する歷史を說話し及び招魂祭には生徒をして參拜せしむる事

(三)軍事に關する繪畫摸型等を學校に備ふる事

(四)尋常小學校より野戰對抗に類する遊戲を加へ殊に高等小學校に至りては兵式體操の外適宜方法を設けて夜中學校内外を獨步せしむる等務めて其膽力を養ふ事

(五)時々游泳を練習しボート等の競爭運動をなし又海岸を航行し軍艦の來往するあらば之を目擊せしむる事

(六)校下徵兵の入退營には生徒を引率して送迎せしむる事

(七)凡て軍人を尊敬せしめ學校の儀式には成べく軍人の臨席を乞ふ事

(八)生徒をして兵營を參觀せしめ又行軍演習等ある時は之を目擊せしむる事

(九)時々實彈射擊を觀覽若くは演習せしむる事

(十)高等小學校に於ける遠足旅行には山川を跋涉して豪壯の氣を養ひ食料を携へて野宿をなす等艱苦に慣れしむるの方法を施す事

(十一)生徒を引率して害蟲の驅除等をなさしむる事
(十二)土地の狀况に應ずる實業を課し又校舍內外の洒掃修繕等専ら勞働の習慣を養成する事
(十三)襟卷足袋晴傘等を用ゐるを禁じ水浴を行ふ等皮膚を强固にするの方法を設け風雨寒暑に慣れしむる事
以上の各項は男女の區別又は土地の情况により斟酌せん事を要す

●佐藤大佐と小學生徒の問答　去にし廿三日、廣島縣、安藝郡、牙田村長、有志十數名、牛田小學校敎員と共に、生徒十九名を引きゐて、さきごろより、廣島陸軍豫備病院にて、療養せらるゝ、佐藤大佐をおとづれて、病床のつれ〴〵をなぐさめんとしつるに、大佐にはこのごろ快き方になられしとて、年長者におひたる後、生徒をもわが病室にまねぎ入れて、さて床の上に居ながら、突然號令して曰く、二列に作れ、
(生徒)二列となる、(大佐)左へならへ(生徒)左の手を腰にあて右の手を垂る、(大佐)番號を、(生徒)一、二、三と各番號を唱へ頭を次へ番に掉る、(大佐)二番に問はん、住所氏名如何、(三番生)某地某氏名、(大佐)三番の後列は如何、七番は如何と一々問ひ了り更めて衆に向つて云くお前等こゝへ來たるは何等の用だ、(一番生)アナタを見に來たのでガンス、(大佐)フン、余を見に來たといへど人形の樣に思てか(一番生)イエ、支那へ軍に往きなさッタケン、(大佐)軍に往ッたからッて見に來ることはあるまい、(二番生三四番生) 君の爲め國の爲め軍に往きなさッ

て怪我なされたゲン……ソレで見舞に來たソデガンす、(大佐)さうかそれは有りがたい、併し軍に往くと怪我をしたり又は死んだりするが、さうすると君の爲になり國の爲になるも親をどうする親が養はれんぞ忠義になりても不孝にはならぬか是に於て生徒答ふる能はず默して互に面を見合す、大佐莞爾として徐ろに曰く、君に忠義なれば矢張り親にも孝行になるのじや、君の爲には余も此樣に怪我をしたといひながら負傷の足を示す、(足は膝の上より切斷し繃帶にて纒へり)怪我しても死んでも君の爲め國の爲めなれば宜しい、まだこの先き某國と軍をすることもあらん、某國と戰ふこともあらん、お前等も兵士となりて往くこともあらんその時は生命を抛つて君國の爲にせねばならぬ今日はよく來て呉れた……

さて一同敬禮して立ち出でしかど大佐　亦笑ひながら見送られしとなん。あはれ、ますらをの、心おきて、誰かはこれをきゝて、衣手をぬらさゞるものあらんや、つとめよや、健雄のともよ。

●前田正名氏の女子訓誡演說　氏が、去し十七日、大坂なる梅花女學校の卒業式にて、演べられたりといふ說を聞くに、曰く

由來女子にして、敎育を受たる者を見るに、多くは學問を鼻にかけて、德行修まらざるもの丶如く、現に東京府下に於ける女學生は、兎角世間に容れられずして「アンナ者を嫁に貰つても仕方が無い」と、一言の下に擯斥せられ、折角學問をして、世の笑ひ者となるが多し、斯の如きは正名の實に痛嘆措く能はざる處なるが、諸孃はドウゾ此邊に深く注意して、一は學校設立者、並に敎員の多年の苦心を空しきに歸せしめ

ず、一は一身の德行を修めて、後進者の摸範となり、以て女子敎育の發達を計らざる可らず、而して正名の特に切望に堪へざるものは、風俗の紊亂を匡正するに在りとす、諸孃の知る如く、我國は古來風俗の純良なる、萬國に冠絕するものありしが、近時上下の風俗漸く壞亂し、其極終に支那に濠洲に、至る處吾人同胞の姉妹を輸出し、以て敢て恥とせざるに至る、風俗の壞頹斯の如くにして、尙は匡正する處なくんば、よしや海陸の軍備整頓して、富强の實擧るも、如何んか諸外國の威信を保つ事を得んや、諸孃は日本の賢母となる可きものなれば、此點にも深く注意して、其責任を全うせん事を希望す、尙は最後に一言し置きたきは實業に關する事なりとす、征淸の役首尾能く其功を遂げ、國民皆鼓腹せりと雖も、顧みて內國實業の趨勢を視れば、實に寒心せざる可からざるものあり。

抑も人間社會に於て、先立つものは云ふ迄も無く、衣食なるが、現時吾人四千萬の同胞が、要する衣食の材料は、悉く內國產を以て供給するかと云ふに、第一綿の如き年々一人につき、五十錢宛餘を外國に仰ぎ、其他砂糖、米、麥、大豆等の供給を、外國に仰ぐもの夥しく、其本邦より外國に供給せるものとては、僅かに生糸と茶とのみなるが、之とて近時粗製濫造の弊より、次第に得意を減少しつゝあるが如き有樣なり、是等は國民の共に奮勵し、以て其回復を圖らざる可らざるものなり、而して一家の內相となり

て、世に立んとする諸孃は、深く此事を記臆して節倹の質を行ひ、以て國家の富を計らざる可らず、這は事頗る小なるに似たれども、一人にして毎日出費の内、二厘六毛を節して之を貯蓄せむ、一年の後は十圓の巨額に達す可く、斯くて年を累ぬるの後は、積んで巨萬の富を致す可く、以て國家富强の質を擧ぐるに足るべし、是亦家政料理の任に當る諸孃の、日常心懸けざる可らざるものとす、尚は本日は圖を描き委しく説示せん考なりしも、先刻より諸孃が名文等を拜聽し、其學術の進歩せるを知ると共に、此事の徒勞に屬するを知りしを以て、玆に聊か正名が率うる實業團体を代表して祝意を表す云々、

●茨城縣高等女學校　茨城教育協會にてはさきごろ高等女學校を設立せんとて高崎縣知事に建議し、縣會にも提出しつるが、教育家の内も多くは設立に賛し、一般の輿論もその方に心よれりときく、

●滋賀縣彦根町立高等女學校　の開校式のことは前號にほゞかゝげつるが、今又その委しきことを聞きたれど、更にこゝに擧げぬ、

町立彦根女學校は今回文部省令（明治二十八年一月二十九日）第一號高等女學校規程により文部省の許可を得て彦根町立高等女學校と改稱し本月一日其開校式を擧行せり同日午前十時犬上郡長代理羽根田書記、林彦根町長、今井滋賀縣尋常中學校長、各官衙長、上野尋常小學校長、山田郡書記、學務委員、町會議員、其他の有志者五十余名の來賓は校長の案内にて式場に着席す一同敬禮、次に君が代唱歌、八木犬上郡長の祝詞は羽根田郡書記代讀上野尋常小學校長の祝詞、職員總代戸野教頭の祝詞演説、生徒總代宇治原末子の祝詞朗讀あり次に甫守校長の答辭、唱歌惠みの露あり一同敬禮、いと莊嚴に整肅に儀式を終れり來賓一同へは別室に於て茶菓の饗應等ありて十二時各退散せられたり

祝詞

滋賀縣犬上郡長從七位　八木信行

本日をトし彦根高等女學校開校の式を擧げらる抑も女子教育の忽にすべからざるは多言を要せざるなり本校の由來を尋ぬるに始め私立淡海女學校として頭角を顯し進んで彦根女學校となり而して其成績既に當時に顯著なり今や一層其規摸を擴張し其地位を優尙ならしめんとす當局者の意を斯道に注ぐ深厚なりと謂ふべし之を既往に徵し將來に推すも本校の隆昌以て期すべきなり現在縣下高等女學校たるもの一を滋賀縣私立高等女學校とし一を本校とす冀くは自今愈奮勵研磨女子教育上真の聯璧とし益々光輝を發揚せられんことを聊か述て以て祝辭とす

祝彦根高等女學校之開設

彦根尋常小學校長　上野耕一郎

陰陽者天地之正道也。剛柔者男女之義也。述義能玉人能瓦人。何謂一人乎•無學無藝。非瓦石而何哉。然則欲玉之。復宜開敎之道也矣。本校有見于此。卜本日見舉彦根町立高等女學校開設之式•豈不宜哉。語曰。立於禮。遊於藝。所謂玉汝身者歟。本校三百余名之女生徒自今勉哉。勿令獨賢母賢婦之名。歸孟母梨氏。云爾

答辭

彦根高等女學校長　南守雄晉

本日本校開校の典を擧げらるゝに際し郡長町長を初め貴賓各位の臨場を辱うしたるは本校の光榮何事か之に如ん不肖謹晉か深く謝する所なり顧ふに本校は去明治十九年十月十日彦根の學事熱心家武節貫治氏士地の有志者と相議し私立淡海女學校を創設せしに濫觴し明治二十四年四月一日より彦根町に之を引受け町立彦根女學校と改稱し本日開校の典を擧げらるゝに至るまで茲に五ヶ年其間種々の難事の横はりしも今や文部省令第一號高等女學校と改稱するの榮を荷ふは我舊彦根藩主井伊伯爵に郡長町長を初め當局者各位町會議員及び有志者諸君の盡力に依らざるはなし是不肖謹晉等が日夜感泣に堪へざる所なり蓋し女子教育の要は世の要求に應じ以て賢母良妻を養成し女子の品位を高め其本分を盡すにあり今町長より懇篤なる祝規を辱うす不肖謹晉等是より更に勵精努力し其實功を擧げて今辱うせし祝規の高諭と本日の光榮とに答ふる所あらんことを誓ふ聊か茲に蕪詞を述べて答辭とす

○同校改正の目的要旨及び學科

彦根町立高等女學校は優良にて有用なる婦女を養成し兼て敎職に從事せんとする者を養成するを以て目的とし本科(六年)補習學科(一年)技藝專修科(三年に)分ち本科は女子必須なる通常學科を授け補習學科は小學校敎員若くは幼稚園保姆たらんとする者のために設け技藝專修科は裁縫を專修せんとする者のために設け又特に優美高雅の性情を涵養せんため點茶、挿花、圖畫、音樂、編物等を志望者に限り正課時間外に授く

本科の學科目は修身、國語、漢文、地理、歷史、數學、理科、家事、裁縫、習字、圖畫、音樂、体操とす

補習學科の學科目は修身、敎育、國語、漢文、音樂、体操とし實地

授業及び實地保育の練習等なり
技藝專修學科學科目は修身、國語、裁縫、家事、數學、習字とす
本科生徒たらんとする者は修業年限四ヶ年の尋常小學校若くは之れと同等以上の教育を受けたるもの、補習學科生徒たらんとするものは本科卒業若くは之れと同等以上の教育を受けたるもの、技藝專修科生徒たらんとする者は修業年限四ヶ年尋常小學校卒業若くは之れと同等以上の教育を受けたるものにて年齡滿十二年以上三十年以下の者點茶、挿花、圖畫、音樂、編物の一科若くは數科を修めんとする者は本科第二學年以上補習學科及び技藝專修科の生徒たるべき資格を有する者に限る

○職員

教諭兼學校長（彦根尋常高等小學校長兼任）　甫守謹吾
教諭（滋賀縣尋常中學校教諭兼任）正八位　小山壽之太
教諭（滋賀縣尋常中學校教諭兼任）　福永亨吉
教諭（滋賀縣尋常中學校教諭兼任）　栗田正治
教諭（教頭事務取扱）　戸野美ち子
助教諭　湯淺さく子
助教諭　島野増千代子
助教諭　羽根田鶴子
助教諭　兼書記　松下梅子
雇教員　森脇糸子
雇教員　岡田貞子
雇教員　上坂關子
雇教員　宇津木巽
雇教員　衣斐彦平

●兵士婦人の軍隊厚遇を謝す　神奈川町二十一番地なる栗原とよ子は、さきに臨時東京灣守備隊が、東海道往復の折宿泊せしに、非常に厚遇せしのみならず、後備歩兵獨立第一大隊第三中隊、松本喜左久氏外十三名より、禮狀を贈りしときも、返書に許多の郵劵を封入して、贈與したりとて、同氏等はこのころ、同町役場へ向け、一通の禮狀を贈りて、とよ子に賞詞を與へ、且つ其よし國民新聞に記載せられ度やう、依頼しこしたりとぞ。

●明治十年後の傳染病　明治十年このかた、昨二十七年になるまで、十八年間に發生せし、全國の傳染病を其筋にて取調べたるに、この三病は、最

も數多かりしとぞ。

虎列剌病　患者　四十六萬三千五百七十二人
仝　死亡　三十一萬二千八百四十六人
赤痢病　患者　六十七萬八千八百八十二人
同　死亡　十五萬八千四百八十五人
腸窒扶斯病患者　五十萬二千二百三十六人
同　死亡　十一萬五千五百五十一人

●孝婦　このごろ京都なる博覽會に、老たる媼を脊に負ひて、かなたこなた、見めぐりつゝ、いと懇に何くれと語りなどして、睦げなる婦のありけるを、事務局の人々、よびとめて、ことのよしを問ひけれど、こは我母八重野とて、今年齡八十になれるが、老の身の命今日ともしらず、いかで一度、博覽會といふものを見てしがな、といはるるに、げにさらむとて遙かなる路をおぼつかなくも、かく上り來れるなりと答へたりといふ、この婦は愛知縣尾張の國中島郡祖父江村の山田紋次郎といへるが妻のふじとて今年四十四歲になれるなりと聞く、あはれ孝婦。

●貞女　岡山縣後月郡とのみきゝて、村の名をもらしぬ、ここに眞宗妙連寺の住僧閑部清月が妻に、おと音とよべるがあり、醫竹中節齋が三女なり、この清月は去し二十年のころ學を京都なる大學林に修め、廿四年の秋、業を卒へて故鄉に歸れり、かくて、廿六年の春のころこのおと音をぞ娶りたるなり、おとねかはかたち人にすぐれたるのみならず、裁縫のわざより糸竹に至るまで、わたらぬことなく、いと溫和にしていさゝかも浮きた

る心なく、よく閨節を守り、常に質朴を旨として、よく家を治めけり、さるを昨廿七年の二月のころより、夫清月肺病をわづらひて、心地常ならず、種々に手を盡せども日に月に重りゆきて、今は起つべくもあらざりけれど、清月はおと音を枕邊近く呼びよせて、さていへるやう、おのれ病の床にふしてより、數多の月日を重ねて、種々に醫療すれども、いさゝかも驗なし、およそこの病にかゝれるもの、癒ゆるは稀なり、われも亦生くべくも覺えず、されど汝は年もまだわかゝれど再他の家に嫁ぎて身の終を全うせよ、と切にいふを、おと音、貞婦は二夫に見えずときゝはべれ、如何でさるあぢきなきことの給ふとて、只泣きてのみすぐしゝが、清月は病遂に癒えずして、亡き人の數に入ぬ、されどいよゝ歎き憂ひて悲しさやる方もなく、後のことゞも懇に弔ひてけり、さるほどに、こゝかしこより嫁に聟にこひきこゆるものあるを、いと憂きことに思ひて、うば玉の黑髮そり下し、墨ぞめの衣手を身にまとひ日毎になき人の冥福を祈れりとなん傳へきゝぬ、あはれ貞女。

●受賞者

東京々橋區　岸　とく

右の者儀、奉公勤中、給金は聊かも身に附けず。親元へ相送り、追々父妙念儀及老衰候に付、主人方暇貰請、妙念手元に附添、朝暮共厚く介抱致し、女の手稼にて其日を相營み、困窮の中、母好み候品は、調爲給孝養を盡し候段、軽き者には、奇特の儀に付、褒美として、鳥目三拾貫文爲取遣す。

明治元戊辰年六月三日

東京小石川區　神谷　とき

右者、素より貧困者にして、常に三味線指南を業となし、夫金十郎は日雇稼を爲し、目下の生計上は別に變ることなく、平素の品行惡しき聞ゑ無之趣。

明治三庚午年正月八日

東京小石川區　松原　よね

右者、夫桑吉既に死亡し、自然貧困にして常に女髪結を業となし、老母女子の二人を養ひ、平素の品行宜しき趣。

明治九年四月二十九日

東京本郷區　古澤　てつ

右者、夫金次郎は鐵業職工にて、他家へ通勤致し、てつ儀は針仕事等致し、子供六人を養ひ居り、平素不品行の聞、無之趣。

明治四年辛未一月失日

愛知縣尾張國中島郡國府宮村大字治郎丸平民丹下藤兵衛妻

丹下　よね

資性貞淑、明治十四年、藤兵衛に嫁し、一男一女を擧く、姑けい固より痼疾あり、よね婚嫁以來、日夜看護し、傍ら勤儉を以て、能く家道を整す、姑沒して後、舅新之右衛門に事ふること、益々篤く、遂に知人に對し、此婦にして、我臨終の水を援らは、毫も憾なし、と謂ふに至れり、孝養渝らざること、玆に十有五年、一日の如し、隣里其孝貞を稱せざるなし、洵に奇特とす、仍て其賞として、金二圓五十錢下賜す、

明治二十八年七月二十四日

熊本縣菊池郡菊池村

高田　ゆきゑ

平素孝養の志厚く、母つき、明治十七年以來老衰精神錯亂、且つ聾となり、身體自由ならざるや、日夜蓐に侍し、只管看護に心を盡し、嗜好は必ず之を侑め、又或時は、自ら脊負ひて、母の欲する所に遊行し、其病鬱を慰め、看護の傍、長女ときと共に、紡績裁縫等に從事し、僅の賃金を得て、其家計を支持する等、玆に十有餘年、

其志行一日の如し、洵に奇特とす、仍て其賞として金一圓下賜す。

明治二十八年七月十六日

●受賞者小林氏の文　さきに女鑑第八十八號にかゝげつる、受賞者小林ちん子より文おこされぬろの文のはしに

しづの女が縫ひなす糸の一すぢも
みな大きみのめぐみなるらん

かぎりなき身のうき事を忍びきて
老木もはるにあふぞうれしき

●茶の湯と生花　これ博文館編輯にして、日用百科全書第二編として、梓に上れり。著者は、おるれ師匠様なりとか、惜い哉其の名を逸しぬ。例の如く、題字と寫眞銅版の綺麗鮮明なるもの、數葉を挿み、表紙と口繪は、華邨子の意匠に成る、唯おやしむ、茶器の配置誤れる無きやを、材料豐富、記述平易、上欄これが問答を掲げたる、用意周到謝すべし。然れども、秩序整はずして、獨習の栞には、適せざるべし。且、全編殆んど茶の湯法と煎茶にして、生花は數十頁に過ぎず。さはいへ、紙數凡ろ二百五十頁に景物を添へ、あたひ二十錢とは、廉價なり。ひめたちよ、雨夜の徒然に、坐右の伴侶とせむ、蓋、編者の所謂、裨益する所正に多かるべし。

●佛國人生花を學ぶ　法科大學の傭教師なる、佛國人法學博士ルボンといへる人は、極めて日本好の人なるが、我國の氣風のすぐれたるをよろこびて、美術に、文學に、ろのことにまされる點など、兎角佛文もて書きしるして、かの國に知ら

しめたる功によりて、叙勲の榮をうけしことさへあり、この人、法學の博士なれども、寧ろ文學にすぐれたる人なりといふ、さてさきごろより、令閨を古流の生花をよくする千羽理芳翁がもとにやりて、其術を學ばしめ、且生花といへる書を著して、本國の人に見せんとて、今日光に避暑中ながらも、書信をもて怠らず、教をうけ居れりといふ、かくて生花のことを、外國語もて記し丶は、只英文遠州流のみなるが、これとても全からぬ節節多かれど、こたびは、か丶ることにも、よく注意すとき丶ぬ、とまれかくまれ心深き人なりけり。

●朝鮮の女學生　朝鮮の政府にては、かねて女學生五人を、我東京にわこして、養蠶を學せんとて、旅券さへ取らせたりけるに、折わしくも朴泳孝李圭完などのこと起りたれど、暫し留めらるべしといふ、されどこのこと治まりなば直に來るべしと、このごろ公使と東京に來れる書記生はものかたれり。

●此頃の天氣　不順にて人の身體によかるまじけれど、何にまれ心すべきなり、さる人の話に今年は田の水暖なれば米作にはよかるべしと。

●第八回尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員撿定試驗問題(つゞき)

○化學科授業法　(第一)

「アンモニヤ」瓦斯の容量組成を實驗によりて教示する教案を綴れ

○化學科授業法　(第二)

通常の燐酸「ソヂユム」($NaHPO_4$)の水溶液は少しく「アルカリ」性にして硝酸銀の水溶液は中性なり今前者に後者を注加し沈澱の生ぜざるに至りて之を濾過し濾液に「アンモニヤ」の稀薄水溶液を適度に加ふれば更に燐酸銀の沈澱を生ずるを實驗に徴

し其說明をなすべし

實驗の爲め左の諸品を供ふ

試驗管、漏斗、濾紙、試驗紙、燐酸「ソヂユム」液、硝酸銀液、硝酸、「アンモニヤ」液

○化學科實驗

一　鹽化水素瓦斯を「フラスコ」に滿し之を同容積の水に吸收せしめ其溶液の濃さを測定すべし但し修酸（$C_2O_2(OH)_2 2H_2O$）の標準液を造り苛性「ソーダ」液を介して測定するものとす

二　附與する溶液より鹽基一、酸一を撿出せよ

○農業科試驗問題

一　耕鋤の精粗が土壤に及ぼす影響如何

二　剪枝摘芽は如何なる効用ありや其理由を問ふ

三　蠶兒就眠及眠起の際に於ける取扱上の注意如何

四　麥類蔬菜の施肥法及び其相違ある理由を擧げよ

五　家畜の飼養標準とは如何なるものを云ふか

六　精巧なる歐米の農具を我國に用ふるの利害を問ふ

以上六問は筆答せしむ

七　土壤農產物及び種子數品の名稱

右實物を示し口答せしむ

八　小學の兒童に農業を授くるの要旨（尋常師範學校教員志願者のみに問ふ）

九　中學の生徒に農業を教ふるの順序（尋常中學校教員志願者のみに問ふ）

右口答せしむ

十　陸田整地法

右鍬をとりて實地に行はしむ

○商業科試驗問題

（一）橫濱の甲某神戶の乙某に某物品若干を注文して某は其注文に應じて前上商品を甲に輸送せり　此場合に於ける往復書信並に送り狀を作成せよ

甲某は右商品を前橋なる丙某へ依托販賣として仕向け　丙某は適當の時季に於て賣り上を果し仕切狀を甲某に送れり此場合に於ける往復書信並に仕切勘定書を作成せよ

（二）吾國の商人例へは英國龍動の一商業家と直接取引を爲さんとするに未だ相互未知の間にあり充分の信用なき時は如何なる方法を以て其取引を開始するや此場合に於て彼我商人の普通爲すべき手續を說明せよ

（三）取引所に株主組織と會員組織との二種類あり其組織の大體及利害大略を記るせ

（四）賣先保證手數料（デレクレデンコムミッシヨン）とは如何又手數料は多く如何なる種類の商業に用ひらるゝや

取引上（本邦）に於ては如何なる方法を以て賣買を爲すや

（五）左記の證書類を解說せよ

當座小切手　預金手形　約束手形
爲替手形　荷爲替手形　割引手形
商業手形　銀行手形

(六)當座預金とは如何なる預金なるや　當座勘定開始の手續を問ふ
(七)我國現今の倉庫會社は商業上に如何なる働きを爲し居るや
(八)船積證書を解釋し其使用法を說明すべし
(九)海上保險狀を解釋し其種類を舉けて之を概說せよ
(十)我邦現行の稅關運上目錄を說明すべし

○手工科

設問　(口頭)

(一)小學校に於て手工を課するの目的を問ふ
(二)小學校に於て手工を課するとせば尋常科に於ては如何なる仕事を課するや又高等科に於ては如何
(三)粘土細工厚紙細工は如何なる仕事なるや又如何なる方法にて之を課するや
(四)木竹の細工は如何なる方法にて之を授くるや又如何なる物を如何なる順序にて製作せしむるや
(五)師範學校にて課する金工は如何なる方法にて之を授け如何なる物を製作せしむるや
(六)小學校手工教室に於ては如何なる物品の準備を要するや(木竹の細工に要する工具は生徒の數を假定して其種類及數を筆記せしむ)
(七)手工を授くるに當り他の學科と異なりて特に注意すべき事項を述へよ
此他木工工具の手入法鋸附法燒の入れ方等に就き試問す

實地

(一)硯箱を製作せしむ(寸法形は隨意)
(二)墨壺を製作せしむ(模本を示す)
(三)炭取の圖案を作らしむ

○家事試驗問題

(一)衣服の保存に關する心得を詳述せよ
(二)食物調理の目的を說き其方法の重なるものに就きて得失を舉ぐべし
(三)居住すべき土地の撰擇に就きて注意すべき點を列記すべし
(四)出入金の一覽表を作る方法並に理由を記述すべし
(五)次の諸項を日記帳に記入すべし

四月十九日	松の鉢植但鉢とも	金一圓七十錢
仝二十一日	醫師の車夫への心附	金二十錢
仝二十二日	湯錢	金七錢三厘
仝二十五日	古障子賣却代	金一圓十五錢
仝二十六日	菓子一折但某氏への進物	金一圓
仝二十七日	袴仕立代	金三十五錢
仝二十八日	違失金	金五十錢

仝二十八日　石油一罐　金九十七錢
仝二十九日　家族一同王子行に付費用　金四圓三十錢
仝二十九日　生命保險會社への拂込金　金一圓五十二錢

右五題午前八時ヨリ正午迄

(六)胎敎の必要なる所以及び之に關する心得を問ふ

(七)幼兒の德育上家庭に於て注意すべき諸件を列擧して其梗概を說くべし

右二題午後一時より同三時まで

○裁縫科

(一)裁縫を敎授するに雛形を用ゐると實物を用ゐるとの可否を問ふ

(二)巾一尺

丈二丈四尺八寸二分にて八布遣ひ馬乘袴の裁方積り方を記し且出來上り寸法を明細に記すべし

(三)巾九寸五分

丈五丈七尺(兩面物)

右の布にて

十二歲　六歲の女兒袷表一枚つゝ及十歲の女兒羽織表一枚を裁合せんには其積り方如何

但袷には相當の腰上げを見積るべし

(四)男物單羽織半身を縫ふべし

(五)二尺巾

金巾三尺にて子供洋服の極單易なるものを裁縫すべし

但雛形なり番がけをみしんにて縫ひ其他は假縫のまゝ

○習字問題

(一)善學者假人之長以補其短

(二)苟可以寓其巧智使機應於心不挫於氣則神完而守固雖外物至不膠於心

右二題楷行草三體

(三)萬のとかあらしと思はゝ何事にもまことありて人をわかすうや〳〵しく詞すくなからんにはしかし

本字は假名文に適當の字體を用ゆべし

○習字敎授法問題

(一)習字敎授に於ける文字の大小に就き初等敎育及び中等敎育に對する意見を述べよ

(二)普通習字敎授法に就て特に注意すべき要點を擧げよ

○用器畫法問題

第一問

甲圖ab及a'b'は空間に在る一線の正面圖及び平面にしてGLは其線なり今此の線が各畫面と爲すところの實際の角度を示すべし

第二問

乙圖abcなる三角形及sなる圓形は各圓錐及圓柱より成立せる相貫體の平面圖にしてGLは基線なり今此の相貫體の

正面圖を作れ

第三問

乙圖の圓柱又は圓錐を展開せよ

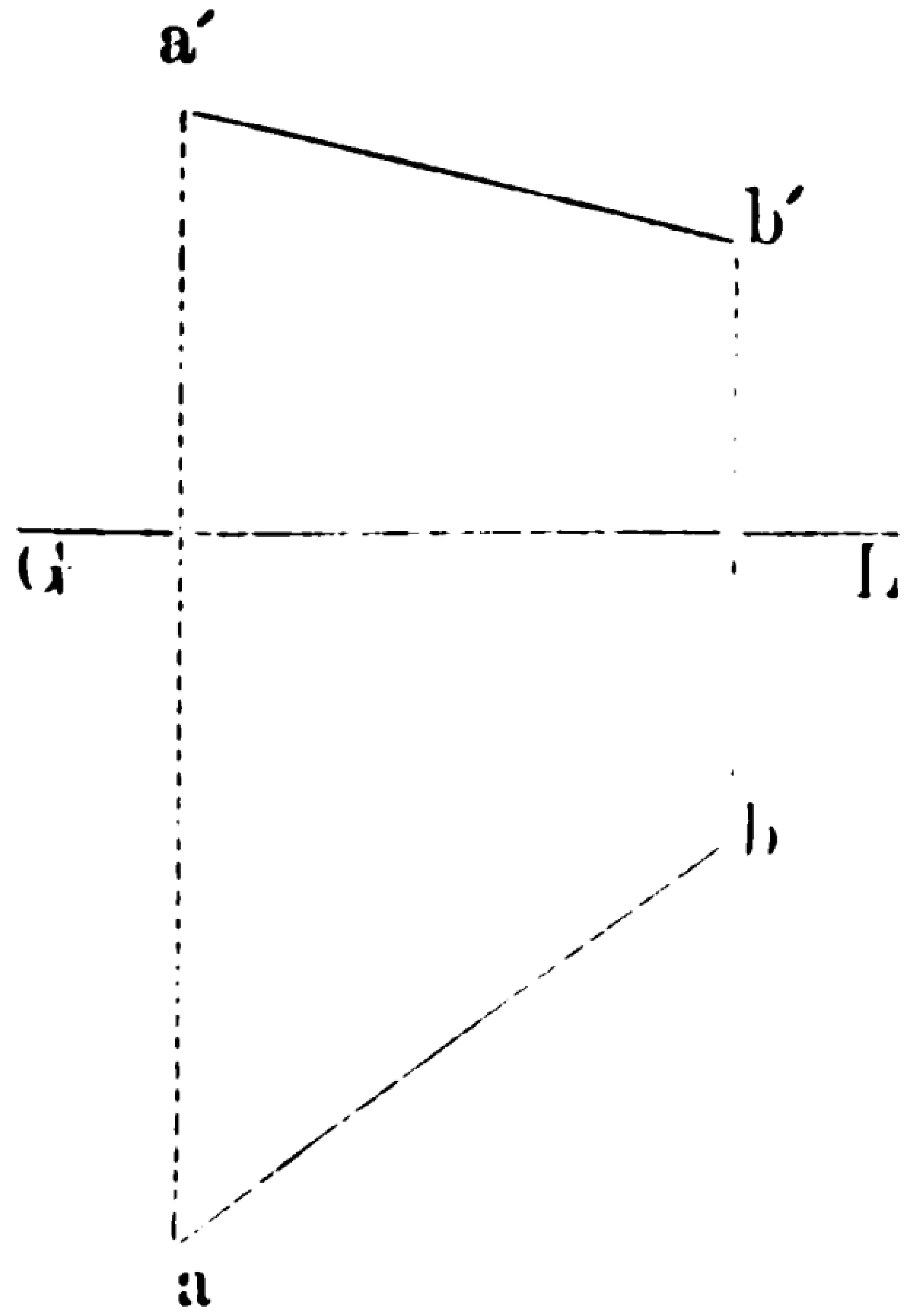
第四問

爰に徑一寸二分高二寸七分の圓錐及徑一寸五分長さ二寸五分の圓柱あり此の二個立體の透視畫を作るべし

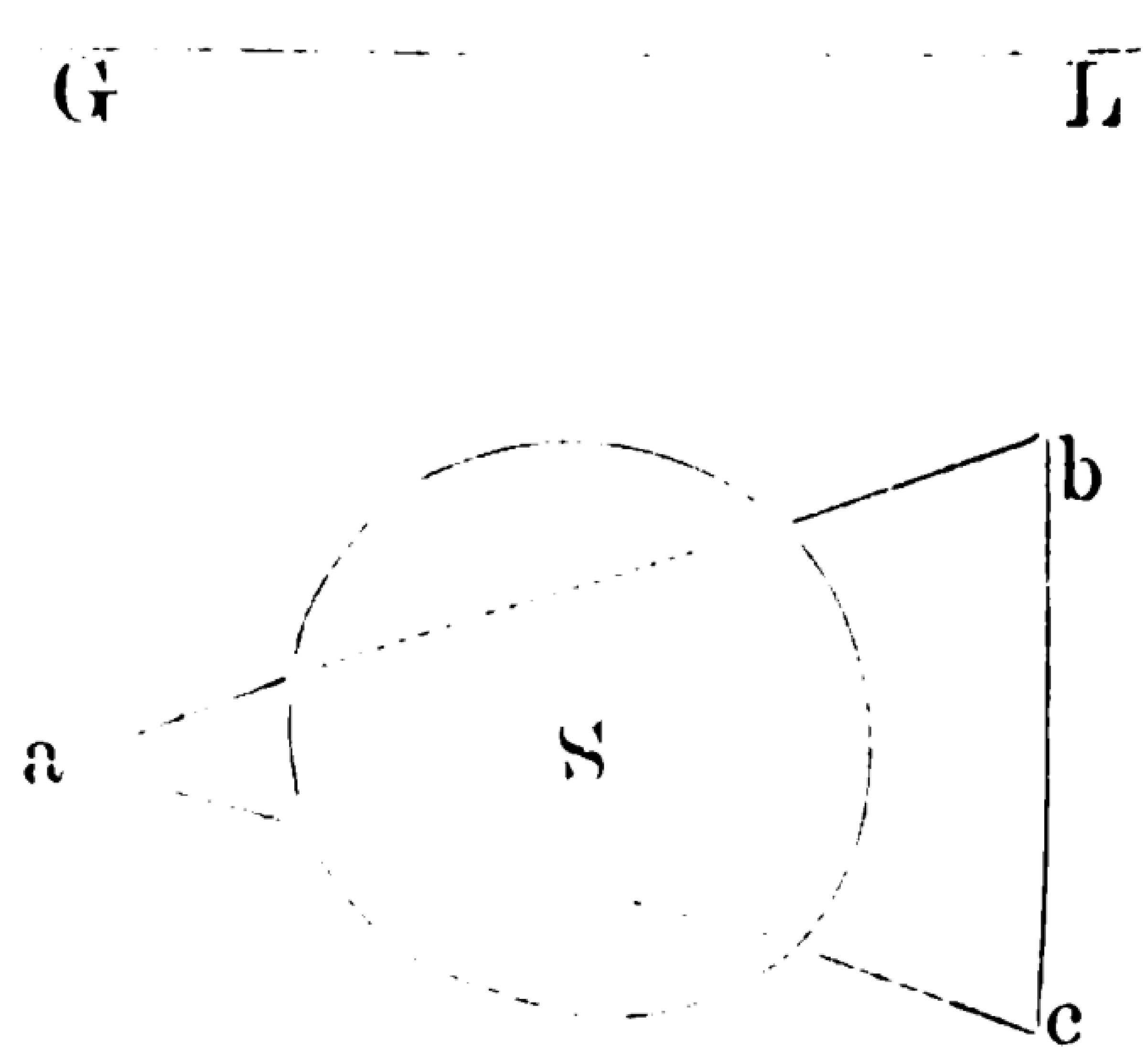
注意　圓錐は畫面の背部に直立し圓柱は軸を畫面に直立に保ち其右側に在り

視點の位置併に物體と又は物體と畫面との距離等は凡て畫者の任意とす

甲圖



乙圖



○毛筆畫

寫生　うそ鳥

新案　冬山水

臨畫　北硐紙布袋

廿八年教員檢定試驗圖畫科問題

教授法（毛筆畫 鉛筆畫）

一　小學校にて教授すべき圖畫の種類を示せ

一　小學校に於て寫生を爲さしむるには如何なる方法に依るか

一　圖案を練習せしむる方法を示せ

一　圖畫科教場に於て特別に注意すべき要點は如何

一　長短二線を定めて楕圓形を作る方法の内其一種を説明すべ

し

一 要に鉛筆畫及び毛筆畫の摸寫せしもの各六葉あり之を甲乙丙の三等に區別すべし

自在畫(鉛筆畫)

一 寫生 鉛筆を用ゐて石膏製半身人物を畫かしむ

一 着色 水彩を用ゐて簡單なる器具を畫かしむ

圖案(全)

一 花瓶 物質任意 各自の意匠に依りて圖案せしむ

但平面圖を作り平圖面は略すべし

○音樂科實地

第一唱歌

一 音階

二 音程

三 中等唱歌第十四曲(單音)

四 小學唱歌集第六十二曲(複音)

五 中等唱歌集第十八曲(四部)

六 新曲三曲

七 聽音四題

第二樂器

一 音階

二 中等唱歌集第十二曲(三絃合彈)

三 同 第十七曲(四絃合彈)

四 新曲二曲

法意 風琴の外にバイオリンの試驗を請ふものあるときは本問題を斟酌して試驗するものとす

○音樂科設問

一 体操を課する際軍歌を唱はしむる効用

二 拍子とは如何

三 拍子の種類若干ありや

四 風琴の不正なる音律を調整する法

五 一、二、三、四、五、なる振動の比をなす諸音を大譜表に記入すへし但最低音を低音部譜表第二間の(ハ)に定む

音樂科教授法

一 音域を擴むるの方法如何

二 音聲を美にするの方法如何

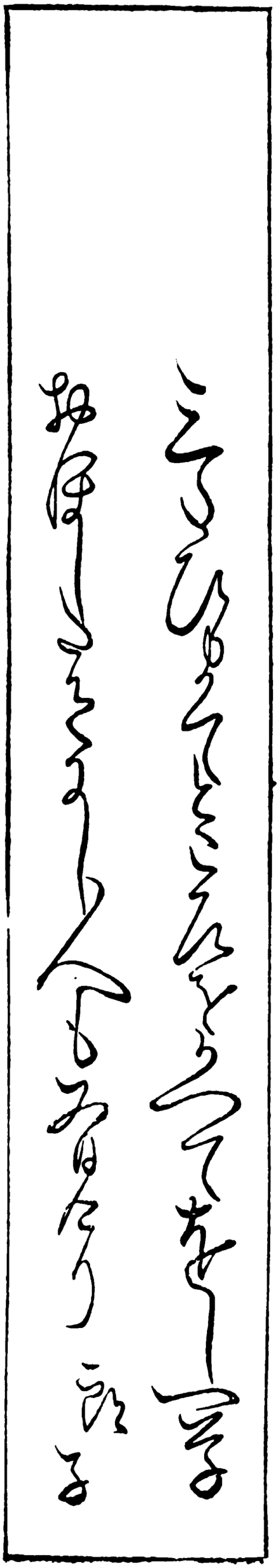
三 實地授業

(完)

兼題

- 八月廿日
  - 歌 女郎女
  - 文 夏期休業の感
- 九月五日
  - 歌 月夜琴聲
  - 文 秋草を見る記

前田朗子染筆







教の庭

八月五日兼題　秋扇（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　千葉縣佐倉　植木[illegible]鋼子

猶のこる暑さに打ちも措かれぬを
秋にあふきと誰かなけくらん

地　三河國寶飯郡睦美村大字牧野　鈴木美恵子

夏の日は風のあるしとあふかれし
身のうへにしも秋は立ちけり

人　同縣同郡同村　牧野梢子

飛鳥のつくれはゆみもかくるゝを
秋のあふきのなになけくらん

人　長野縣西筑摩郡讀書村　遠山たゝ子

手になれしあふきもいまは秋風に
いつしかうとくなりにける哉

いつの間に夏はすきけん桐の葉の
秋にあふきとなりにけるかな　安井章子

ともすれは忘れられけり秋かせの
ねやのあふきに取かへしより　住山幾子

たゆみなくとりし扇もあきのきて
わすれかちにもなりにける哉　内川はる子

秋風の吹きそめしより手なれつる
あふきも今はすてられにけり　内田たけ子

手ならしゝなつの扇もいまははや
打ちすてらるゝ頃となりけり　降田槇子

手ならしゝねやの扇のすてかねつ
あきそと萩のかせはふけとも　溝口寛子

すてかねし扇をまたも手にとれは
涼しき風にあきそ忘らるゝ　越山雪子

なつすきてねやの扇のすゝしきは
あふく風にやあきはきにけん　小川富子

手にならす扇のつまにたよりけん
秋かせかよふねやのすゝしさ　小川すみ子

てならせる扇もいまはわするまて　神田樂子

のきはの荻にあきかせそふく

いつのまに秋は立ちけん此の朝け　成田　延子
あふぎを今はおきわすれけり

涼しくてきのふにかはるはつ秋に　西村とら子
あふぎをいつか打ち忘れけり

よのまにや秋はきにけん涼しさに　野村千代子
けさはあふぎも打ち忘れけり

あきのきてたもと涼しく成ぬれど　溝口なほ子
手なれしあふぎ捨もおかれず

手になれしあふぎも今はおき兼つ　楠　精子
あつさなからに秋のきぬれは

せみの羽のうすき袂にかはらねは　芝田　源子
あきにあふぎは風の身にしむ

いつの間に秋は來にけん手馴しゝ　吉川　純子
あふぎに風もすゝしかりけり

秋きぬと目にはみえねと涼しさに　水島　郎子
なれしあふぎも忘られにけり

きのふまで手なれし扇わするまで　松原　常子
いつのひまにや秋は立ちけん

きのふまでならさぬひまもなき扇　澤田　俊子
今朝よりあきとなりにける哉

あきあさみにはの萩原かせふけと　木村　兼子
またすてかねつ閨のあふぎは

この朝けかよふあふきのあき風は　荒井きく子
忘らるゝまてめつらしきかな

秋風の立ちてはつひに手ならしゝ　佐々有隣子
あふきもよそに打わかれけり

世のひとのうつろひやすき心をは　磯部つや子
秋のあふきもうらむなるらん

手ならせるあふきもいつか秋風に　吾妻ちか子
わするゝはかりなりにける哉

夏はたゝ風をたのみしかはほりの　山本いと子
秋はうとくもなりにけるかな

おとつれぬねやのあふきの風涼し　伊賀　直子
人のこゝろにあきやたちけん

秋風はうちそよけとも手なれては　諸井くら子
すつるも惜きあふきなりけり

今さらになれてはをしきあふき哉　杉浦いと子

身にあき風のふきはそむとも

秋風の身にしむからにこのころは　よそになりゆく我あふきかな　舘脇ます子

手ならしゝあふきもいつか秋風に　かはりはてたる今朝の涼しさ　池谷らん子

いつの間に秋はきにけん手に鳴す　あふきの風もいとゝ身にしむ　毛受しげ子

ならされし夏のあふきも空そみの　世のあき風にのかれかねけん　太田貞子

堪へかねしねやの暑さも忘れけり　あふきのつまに秋やかよへる　根岸初音子

少女子かならすあふきの舞の手も　秋かせかよふけさそすゝしき　根岸杉子

夕まくれならすあふきの要よりや　すゝしき秋は立ちそめにけん　澤田はる子

扇をはおきわするまてなりにけり　きりの一はにあきかせのふく　長島賓子

すてられしあふきの内にはつ秋の　千々の思ひやたゝみこむらん　浦島松子

秋立てとまたすて難きけさはしも　妹にあふきのかせそすゝしき　浦島龜子

はやあきの扇のかせのすゝしきは　しなとの神のめくみなるらん　松原勝子

たのみつるあふきもいまは秋風に　かはるならひやあはれ世の中　中島周子

夏ころもまたかへねとも秋のきて　あふきの風のまつそすゝしき　水島よし子

ときのまもすてれきかねし扇すら　あき立つけさは打ち忘れけり　長澤綾子

此ころはたもと涼しくなりにけり　あふきわするゝ秋きたるらん　大塚こう子

ふきそめしけさの秋風身にしめと　なはなつかしき夏あふきかな　高橋琢子

衣手につゆしりそめしゆふへより　ならすあふきもれき忘れつゝ　河野文子

秋きてもすゝしき風のふかさらは　なれしあふきを忘れましやは　山内かく子

秋風のふきそめしよりかはほりの　山内照子

はかなきものと今はなりにき

手ならしゝ扇の秋せもけさははや
すゞしき秋となりにけるかな　畠山千代子

秋立てはあふきの妻もいまははや
又こむとしのなつやまつらん　名取正代子

末廣くちきりおきたるかはほりの
つれなき今日の秋にあふかな　杠　秀子

世の秋にあふきのみかは愛らるゝ
さかりは人もなかゝらめやは　丸山須磨子

めてられし夏もありしを今は世の
あきにあふきとなりにける哉　牧野　幸子

末廣のかねてそろひしあきかせそ
そのみの上にふきかはりぬる　進藤かね子

なへて世の是やす形かたのめてし
あふきも秋のかせにもれぬは　進藤もと子

あふきこそ夏の頃にはめてらるれ
たつあき風にすてられにけり　花山保江子

秋風にすてしあふきをとりいてゝ
のこるあつさにならすころ哉　中村よし尾子

こんとしのなつの命とひめおかん
手にたにふれぬ秋のあふきを　林　久子

はかなくもすてられにける扇かな
けさあき風のそてにかよへは　廣田とめ子

ふく風はかはりはてねと昨日けふ
わすれかちなるさしあふき哉　山崎すゑ子

わかやとの秋の花つまさきそめて
あふきのつまにあき風そふく　林　光子

秋たてははやわすられぬ夏の間は
打もおかれぬあふきなりしを　羽田三緒子

わすれねと手にとりわけぬ扇かな
秋のうはかせおとつれてより　河田いし子

秋たちて風もすゝしくふきくれは
夏のかたみと見るあふきかな　近山まつ子

あきといふ名こそはたてれ中々に
ねやのあふきのむつましき哉　永井さい子

秋たちしあふきの身こそ悲しけれ
きのふの夏をとふひともなし　梶井　久子

いまははた秋かせたつか古されて　田中　麟子

あふきとしもはいふ人もなし

手にならす風も身にしむこの頃は　井出 信子
あふきのつまに秋やたつらん

淺からすめてにし夏のはなあふき　白石 藤子
うつらふ秋になりにけるかな

手もたゆくならしゝ夏もあき風を　宇野 薫子
まねくあふきの音そまれなる

秋風をさそひしなつもすきはしら　宇野 富子
床にかさりてあふくけふかな

今ははや忘れられつるあふきかな　宇多田揚子
秋ふくかせのたもとすゝしき

物みなのかなしき秋となりしより　荒瀬布佐子
あふきの風も身にそしみける

なほあまる暑さはあれと秋なれや　瀬戸 榮子
あふきの風もたのまさりけり

おくとなくれきにけるかな露霜の　野崎 錄子
秋たちしよりなれしあふきを

あきゝても世にすてられぬ扇には　久松せい子
殘るあつさそいのちなりける

秋きてもめてられにけり七くさに　久松とく子
月のにほへるそのゝあふきは

夏の日は世に愛られしあふきさへ　青木 春子
はやくも秋にあはれ見えけり

きのふけふふく秋風のすゝしさに　岩崎 今子
手なれしあふき忘られにけり

たのみてし扇もいつかあきくれは　鎌形 恒子
をしまれぬ祉あはれなりけれ

桐の葉はれちそめぬれと今もなほ　鎌形 素子
あふきは更におかれさりけり

おくまなく世にめてられしなつ扇　掘石よし子
ふくあき風にすてられにけり

あきくれは世にすてらるゝふる扇　市川 柳子
人もかくそと身をこそはつめ

手になれしあふきもいつか秋風の　曲澤ひで子
涼しきまゝにすてられにけり

よひ〳〵になれしあふきの心には　曲澤秋香子
いかにつれなきねやのあき風

ならの葉のそよ吹く風に馴そめて　小野田のぶ子

あふきわするゝ秋のころかな
はかなしと世を秋風にまかせけん　吉田　芳子

あふきも今は身をたゝみつゝ
秋たては打ちろ忘るゝさしあふき　横山きみ子

さしもに夏はいのちなりしを
朝な夕ななれしあふきはあき風の　福木利家子

立ちての後もはなたれぬかな
けさよりはならす人なく成にけり　福木　治子

あふきよりころ秋は立つらめ
秋風のけさたちぬれは手ならし丶　坂本　乙子

あふきは手にも取られさり處

八月五日兼題　雜誌を讀む

天　長野縣長野町八百四番内一　吉田　芳子

顧みれは五六年以前にありては世に歐風とかいへるあた風ふきすさひ女の身にてありなからあやしき装ひをなし男女同權なと口々にのゝしりあひて萬邦に秀れたる貞操温順なといふ美德を失はんとするに至れりきかゝる折に生れ出てしこの女鑑よ朝に夕にこれを歎きこれを憂ひ貞烈を賞し輕薄を戒め粗暴を罪し淑德をたゝへ彼か長をとりて我か短を補ひ今日の賢母良妻を養成せられしこと誰か其功を仰かさらむ其論説を始め史談家政より教の庭に至るまて一として智をみかき德を養ひ常に躬行實踐すへき事にあらさるはなしまして其筆の麗はしく其文の優なる朝にひらき夕によみ學ひの暇を得て常に此園にあそはゝいかなるうかれ女も温順なる貞女となり輕躁なる少女も賢良なる淑女とならむこと難からさらむ既に清國との和好も舊に復り異國との交際もます／＼複雜をきはむる折からいよ／＼其紙面に改良を加へられ今より進みて妾等か務むへき業學ふへき道なとこと／＼く物せられぬあはれ難波江のよしあしもしらすかゝる深山に埋木となりて朽ち果てむ妾までもこの鑑によりてかたなりにも女の道をしり得るはいとも／＼嬉しき限りなりや

地　山梨縣甲府市山田町　名取正代子

明に治る御代のめてたきにかしこくも我　大君の

みめぐみあまねく都にひなにゆきわたりたかきいやしきれしなべて學の庭に物まなびよろづの物事の理をもさとり得るころいともたふとき事の限なれさてその學のわざをなかからをへて後或は家の事あるは裁ぬひのわざなどをさめんとて是迄おぼねつる學のわざは打すてゝさら〳〵かへりみざらんにはいかにればねよき人なりとも永く久しく忘れずでやはあるべきさりとて家を出でて他にまなぶべき年にもあらず又いとまもなからんにはいかゞすべきかゝる折に近頃女子のよまん料にとものせる數多の雜誌そが中もに女鑑女學雜誌などこそいとめでたきものなれ家の事ををさめ裁ぬひのわざならはんひま〳〵にこれらの雜誌をよみ出でなむ居ながらかしこき御あたりの御事をはじめもろもろの大人たちの説も聞得べく又物事の理をもはた歌よみ文かく事いけ花茶の湯其外學にまれ遊にまれおのがたしなむまゝに學び得らるべしされバおのれもこれらの雜誌よみ出る折々に其論説を見てはおのれもかくあらまほしと思ひ史談を見ては古の學の道いまだあまねからぬ世にもかゝるめでたき孝子貞婦ありしを感じ家政を見てはおのれものち〳〵かゝる心得もて世に處せんなど思ひ其外學の園教の庭といづれもめでたき文なりけりされバ此雜誌をよむの樂しさうれしさに寢食も忘るゝ計りにて此夏の短夜なんどは、しらず〳〵あかしつる事も折々なりき實によめども〳〵あかぬ文は此雜誌にこそ

人

大阪市北區相生丁百六拾二番邸　梶井　久子

つれ〳〵わぶる窓のもとにおつるたろしとひもとくは此の頃あづまの都にいとも名たかき雜誌なりきろもこのふみよいかなる人の筆のあやならん雄雄しくたけき社説には覺ねず知らずうでをさすらせさら〳〵とざれたる雜錄にはれればねずしらずあぎとをとかせ忠孝義烈の史談にはればねず知らず涙をながさせ言の葉の花さきにほふ文林にはればねずしらず心をまよはすあゝめでたこの文よ讀みもてゆく心のうちにあるはをかしくあるはかなしくあるはなつかしく千變萬化の思

をなさしめさてこのひろき世の中にありとあることぐさを柴の庵にこもる身に覺ゑず知らず識らしむるはいともいともめでたきもの丶限にこそと今までのつれ〴〵もうち忘られてなつかしさにまたくりかへすはあはれなりし史談のあたりになんある

降田　槇子

今日しも國光社より女鑑届きたりいとうれしくてこたびはいかなる事か記されけんとて家の事營むひま〴〵讀みもてゆくに何れも女を敎へ女を諭しよきに導き惡しきをいましめ新しき事を知らしむるやうめでたき文章もて書かれたり中にも三輪田眞佐子刀自が園に笑める梅櫻の如くときはなる松の緑のしたゝることときやさしきけだかき筆もて女の心得べき事どもまめやかにか丶れたるなどはいともめでたく幾度となくくりかへされぬさて卷の中ぞかりに隱岐の院遠島百首の歌をのせられたり之れかのむかし後鳥羽院の隱岐の島にさすらはせ給ひしをり悲しさの餘り詠み出で給ひし御歌なれどいづれもいづれもはかなき世をかこちまゝならぬ御身をなげかせられ都をしのび給ふ御心三十一文字の上にあふれていとあはれなる御歌のみなれどあなかしこしと讀みも終はらでそのまゝ卷をおほひ思はず涙に袂をしぼりたりそもいかなれど雲の上にましますいとき御身をもてか丶るはなれ小島に遷り給ひけんといふかり考ふれど其かみ鎌倉將軍の臣なる北條氏もはら天の下の政をとりて我がまゝのふるまひ多かりけれど院の上いとにくき事におぼし召されいかにもしてこを滅さむやとはかり給ひけるを北條のものども聞き知りて兵を集めてたむかひ奉りつひに此院をぞかゝる所にうつし奉りたるなりけり其御心やいかにましつらん常人さへたびねとなれど一日だに心うきをましてや天津日嗣の御位に居まして金殿玉樓に住みなれ給ひし御身のかゝる人もまれなるはなれ島にうつり給ひて竹の柱茅が屋根にて僅かに雨露をしのぎ給ふことげに御いたはしさの限りなり心なきあまだにこの御有樣を見奉りて涙に袖をぬらしけりとか

や北條のふるまひにくしともにくゝ八ッざきにしてもなはたらぬ心地ぞするかゝる不義の臣いかでか末永うさかゆべきやがて高時の代に至りて一族滅びにけるは善惡の報のたがはざるしるしなるべし世の人これにかんがみ一日一時も忠義の心をむわするべからずといさゝか胸に浮べる事どもをしかきつくるになん

佐々有隣子

誌に雜々あり朝はなによけん夕は此卷よからんと文机のもとによりろひてうちひらき見るにも讀むにもろの人々の作者の意をかきあらはしたるげに花に紅葉にとり〴〵のすがたことむにあかくきよき正道を教へみちびかぬはなかりけりあなめでたき文の林になんろも〴〵妾等が夜となく晝となくとりみる雜誌は此女鑑の右に出べきもの世中にまたとあるまじうなん

太田　貞子

ふりみ降らずみ定めなき此頃の雨につれ〴〵まぎらはさんすべもあらざれば獨り文机に打ちむかひてかい廣げぬるは日頃友となれにし女鑑なりけりあはれ何がしが夜もすがらのすさびなるらむ織り出だせる千種の錦のいともめづらかなるに心もひかれて文の林の奧ふかくわけ入れは玉鉾の道〴〵しきを初め村肝の心ふるまひをもときあかしたる樣〴〵の教への言の葉は濱の眞砂の數限りなく石上古き世の史がたりには香はしきあとをうつして今の世の鏡となし勇ましき烈婦のあとをしるしてはめゝしき心〴〵を武からしめ正しき貞婦のあとをとゞめてはうつろひやすき仇し心をすぐならしめ枝の雪をならし窓の螢を睦びし昔しがたりをしるしてはいきたなき人の心を戒しむ其のほか生きとし生ける人の世の道といふ道のきはみ教へ導かぬはなし文の林のまむゆきはいふもさらなり教への庭のいともねもごろに難波のよしあしを撰び山の井の淺き心をふかめ朝露のはかなき色を正しひたすらにすぐなる節〴〵を明らむるなんいともいともうれしきやあはれ世にふみといふふみはあれどもますみのかゞみ明らけき此のひめ鑑に比ぶる

ものあらんやはあはれ此のふみ其か礎の名に負ふ國の光りと共に長しへに世にひろごり其のしるしの鶴の齡をかけていや榮えにさかゆらむとれもふにつけてもいとゞ行末の頼もしきや

玉鉾のみちの八千また八十くまも
見えてさやけき文ぞ此のふみ

田中　麟子

世の人の智惠を發育するは讀書の學ひころ肝要なれときけり古へよりかしこき人の文なと多く讀みたる人は物のあはれもよくしりつらん近世智惠すくれたる人々のあらはしたる雜誌をある友人が一讀なしてよと送られけれど夜もすから讀みけるに世の人情もあり仁義の教淑女烈婦の傳古人の歷史家庭の道數々あり嬉しくて夜のふくるもしらでよみ終りぬ中にもいとめてたかりしは紫式部の傳なりかの人は佛學に達したる人とこそ世に名高き源氏物かたりも佛法の心なりときく其後佛教雜誌をひもときしに唯佛教と云はとし老て後世の爲の物とのみおもひけるにひねもす吾人の身心になすわざのみならず悉皆草木國土までも佛教の眞理のあらはれてある廣大無邊の儀をかきあかしありけれど婦女子は悟道の修行とてもできかたきことなれと折にふれては雜誌をよむもよきたよりを得らん物とろおもひなりぬる

青木　次子

ひるの暑さにたへかね課業にうみけれど今朝讀みかけし女鑑第八十九號の文机の上に其儘ひらけるをよみつゞけたり七ひら八ひらへぬれどいと美しき女のみどり髮ふりみだして醜くき荒男をものともせで戰ふさまなどありまた十あまり七ひら指にまかせてかへせは撿定問題ろあなるされど確かなる答もなくてやみぬ

卷を掩ひてつく〲思ひ見れど雜誌どかりいみじきものはあらじ古人の書は道理の基を説きしものにて世の移り變るに從ひ其代の政治法律風俗人情に應して解かんころよけれさるを徒らに昔にのみ泥み今を卑むるはいみしきひがごとなりかし道に岐なく理に二つなきも今の世には今の世に應すべ

き道理あり昔の代には昔の代に適ひたる道理あり
まして世の開け行くまゝに事繁くなれるをや今の
世を古書のまゝに行はるゝものと思ひゝかめんや
は今世に發兌する雜誌はいと多し皆能く昔を鑑み
今を照して其代の道理にかなへりことにこの女鑑
よ女の道を細かに說き示せるものにて鑑と名付け
しもげにことわりにてそ

宇多田やう子

女と生れては女の道をたどりゆくこそかなめなれ
徒らに衣徒らに喰ひたゞ安すくくと世に益する事
なく暮さんには人と生れし甲斐なきのみならでむ
しけものにもれとるならん去ぬる明治二十四とせ
の秋つかた國光社よりいだせる女鑑てふ雜誌は今
尙號を追ひ論說史談家政學園文園などあまた題目
をかゝげ父母舅姑に事ふるの道夫を助け兒を育つ
るの道又文學技藝を學ぶの道より一家の生產を營
なむわざにいたるまで我が國ぶりのまことの道を
あきらけくときさとして何一として女の心得とな
らぬ道はあらずかし朝な夕な此の曇りなき鑑みに
打向ひては自然身のつたなさも思ひやられ姿も心
もいと正しくなりてあらぬ道に踏み迷ふうれひな
く心一つに勉め勤まれてあはれ國にむくゆる一業
ともならんかしげにかゝる雜誌は師につかずして
萬の敎へをうけ親しく道を習ひ得らるべき万人の
鑑にそあるなる

植木鋼子

友の許より文の雜誌二種三種送り越しぬるを宵の
程より窓のもとに紐ときぬ歌に文に人々其さまさ
まは有れどあるはうるはしき花の咲出たるごとく
又はめでたき實の結むりたるがごとしまた文の林
のひらけつる事は折にふれては思ひをのべ四季の
移りかはりには天象地儀によそへてけしきをあら
はし見ぬ世のさまをもしのび遠き外國の海山をも
ゑがき出せる抔それともあかす讀めども盡せぬに
いつしか有明の月ほのくくとさし入ぬあはれ此影
のみならずいたづらに我世のふけぬる事こそ恐し
けれされどとて過し月日はれふとも歸らじあすよ
りやつとめはけまん又此人々の歌に文に師とも賴

みてくらさんと心にちかひてふしどにいりぬ

福木　治子

まなく降る雨に外に出ん心もおこらずさりとて一室にとぢこもり文のひもとかんも物うくて只まろひつ起きつ五月雨のふるかひもなき日を今日わすとかさぬるまゝに庭の千草はのきより高きばかり茂り合ひて一しは物うきを添ふるにわびしさいはん方なく只くちなしの花の二ッ三ッ咲きそめしを友とたのみはつかの雨の晴まにおり立ち庭打ちめぐるにをりしもをり戸をほと〳〵とたゝく者あるにたそといふかしみつゝ押開けばつねよりわりなく睦ひあふ友のきたれるが手に書物やうのもの持來たりこのごろのわびしさに都よりくさ〳〵の雜誌どもとりよせはべりたれば君にも見せまほしさにもてきたれるなりと云ふにいとうれしくていざたまへとおくにあないしもろ共になにくれとひもとき見るにそが中にいともうれしくめでたく見はべりしはこれのこの文よこの女鑑よ其おもむきといへ文のかきざまといへいとも〳〵めでたくて他のあるは宗教に泥みあるは女權擴張とかいふ事をいひはるたくひとことなりてまことに其名にそむかず日の本の女どちのかゝみとして朝夕開き見るべきものはいかでこの文にまさるものあるべきかはれのれ幼きよりゐなかに生ひたちかゝる目出たきふみの世にあることを知らざりし事のいと口惜くてこの程都なる雜誌店より最もはしめの卷よりとりそろひあがなひてよみもてゆくにいと〳〵おもしろく夏の日のながきも猶あきたらでともし火のかげをさへたのみつるになん

避暑の栞

夏引の手引の糸の、いとながきこの頃の日を、いかに消たんか。照りはたゝく日影は、荒金の土も、さくばかりにて、家のうちにあるはさながら、甑のなかに入りて、蒸されたらむやうなるに、まして、悪疫さへ、いきほひ猛にさかれば、けがしき都の塵の街にあるは、いとも苦しく、はた、あやうし。されば、世のかゝづらひ少からむ孃達は、はやく、このおそろしき虎の口をのがれて、水清く風涼しきあたりに、のどかに、遊びたまはむこそ、身の養にも、はた、心の養にもあらめ。との、まめ心より思ひつきて、避暑の栞を物しつること、次のごとし。

鎌倉　名所　海水浴

鶴ヶ岡八幡、寶物展覽會ありて見るべき古物多し、公曉のかくれゐし銀杏の木、靜の舞ひし拜殿、若宮、頼朝を祀る白旗神社、地内の蓮池は今が見頃なり○頼朝の墓及屋敷跡○矢柄の天神○鎌倉宮、官幣中社にて大塔の宮を祀す、社背の土窟あり宮をおしこめ奉りし所見るもなかなか涙なり○滑川○公方及び北條の屋敷跡○建長寺○圓覺寺○壽福寺、政子、實朝の墓あり○大佛、三丈五尺のぬれ佛なり、聖武帝のはじめし國分寺の一なり○五靈社、權五郎景政を祀す、力の神さまなり○長谷寺、大和の長谷をまねてうつせしもの東三十三所の一なり○由井ヶ濱、砂清く波平にて海水浴に最よし○稲村ヶ崎、新田義貞の太刀投し所○葛原ヶ岡神社、無禮講にて名高き右少辨俊基卿を害せし跡にて同卿を祀す、人もし行いて訪はゞ春は落花の雪にふみ迷ひ夏は青葉にしげく置く露に袂はしとゞに濡れなむかし○化粧坂○景清の土牢○旅館は長谷の三橋樓、雪の下の角正などよし○海濱院は宏壯なれど多く外人の宿所なれば胸わろくして宿るべからず○新橋より滊車賃三十二錢（すべて下等を標さす）

世のなかはつねにもがもな渚こぐ　あまのを舟のつなでかなしも　　鎌倉右大臣

逗子　海水浴

鎌倉より滊車賃二錢にて行く、海岸遠淺にて女小供の水浴によし、景色山を負て海に臨み江の島かけて富士をあふがむ實に絶景なり○旅舍は長者園、日蔭の茶屋などよし○この地一体に鎌倉大磯などの如く遊客別莊など多からで閑靜にてよろし

江の島　名所

鎌倉より七里ヶ濱をこゆれば僅一里許にて達す、片瀬村より五

六町の間は棧橋ありて渡る〇下の宮中の宮上の宮と順に參拜して(足駄の儘詣は案內者に草履をかるべし)寶物など拜觀し、洋人の別莊などある所を胸わろくも見つゝ過ぎて、坂こし谷こし名物の貝細工など土產の品求めて行けば半里ばかりにて兒が淵といふに達す、こゝには海士の兒らが錢與ふれば逆まく浪間潜りて鮑とるあり、これより磯におりたち岩屋にかけたる棧橋づたひに浪の上を危くも廻りめぐりて行けば岩窟に達す、洞內は眞黑なり、燈火持ちたる案內者に從ひゆけば胎內潜などくゞりて百間も行きたらむ所に祀れる辨天樣あり、鬼氣人をおそひ游氣味わろくて詳くもながめず、昔はこゝに神龍すみ辨天樣はなりし〱それに乘り虛空に微妙の音樂を奏し給ひしとなむ、今もその龍の住むこゝちして恐し、土用浪の立つ頃は激浪この洞內に打いれば人をいれずと〇旅館は惠比壽屋、岩本樓、金龜樓、讃岐屋などよし〇片瀨、鵠沼など海水浴によし、亦このあたり義經のさゝめられし腰越、瀧の口の法難所など古跡多し

大磯(おほいそ)　海水浴

前に渺茫たる相模灘をひかへて遙に大島三原山の雲煙を水天の際に望み、小陶綾の大磯小磯によせてはかへし返しては亦逆捲きて打寄する大浪小波の岩に碎けて玉霰と散るさまは實に東海一の絕勝なり〇この地はじめて松本軍醫總監の海水の効を說きし處なれば我國海水浴の元祖にして其繁昌亦他に比なし、共同海水浴場ありて休息所もあれば大によし、こゝの海水の鹽加減最身體に適すといふ〇鴫立澤、西行法師が「心なき身にも哀は知られけり鴫立澤の秋の夕暮」と歌ひし古跡にて庵室あり、文覺の刻みといふ西行の木像亦虎女の木像あり、松翠深く浪の音淸し〇虎が家の跡といふ處あり〇岩崎の別莊は壯觀なり〇旅館は禱龍館、松林館など宏壯にして眺望もよし其他大小の旅舍多し〇新橋より汽車賃四十三錢

相模歌

こよろぎの磯たちならし磯菜つむ
　めざしぬらすな沖にをれ浪

酒匂(さかわ)　海水浴

松濤園、國府津より半里許酒匂川の手前にあり、構內砂白く松繁れる間に小屋點々として散在し人の借るに任す、されば家族を引連れ自炊してあれば己が別莊にあるが如し、亦賄を同園に托するもよし〇國府津、小田原も亦海水浴に宜し、旅舍もよろし〇國府津迄新橋より汽車賃四十九錢

箱根(はこね)　溫泉

昔にて越せし八里の險坂も鐵路一たび通ひしより亦旅人の過ぐるなし唯箱根七湯古より効驗著るしきに、山水秀麗にして氣候よければ內外人の來り遊ぶ者頗る多し〇湯本、早川前を流れてその音鏗たり釣魚遊泳共に宜し、溫泉宿は福住、小川を良とす、國府津より鐵道馬車賃十三錢〇塔の澤、湯本より人車賃五錢、玉泉樓、玉の湯などよろし〇堂が島、湯本より人車賃二十五錢、小蓬萊館、近江屋、江戶屋などよし〇宮の下、湯本より人車賃二十五錢、奈良屋富士屋よし〇底倉、湯本より人車賃二十八錢、蔦屋、梅屋、仙石屋などよろし〇木賀、湯本より人車賃三十二錢、龜屋、伊勢屋よし〇蘆の湯、湯本より駕籠賃は八十五錢、蔦友館よし〇小涌谷、湯本より駕籠賃六十錢、開化亭、三河屋などよし〇山頂に蘆の湖あり、湖畔に離宮を設せたまふ名產は寄木細工

箱根路をわがこえくれば伊豆の海や
　初島わたり波のよる見ゆ　　源　實　朝

熱海（あたみ）　温泉　海水浴

伊豆國加茂郡にあり背に日金山を負て相摸海に臨み鏡の如き海中初島わたりに白波のたつ見ゆ漁舟の散點するさま實に絶景といふべし○小田原より六里にて人車賃六十錢なり、今は亦人車鐵道といふものあり○錦、浦、海水浴によし○梅園○離宮○木の宮、楠の古木あり○温泉寺、宗弼和尙藤原藤房卿の世を脫れて後來りて結びし庵室の後なりといふ、同卿の七條袈裟などあり、亦庭前に同卿の手植の松あり今は五百餘年を經て老幹亭々たり、遊人來りて往事を老松に問へど老松は答へず唯濤聲の森々たるのみ、折ふしほろほろと散る下露に袂ぬれて「賴む陰とて」の古懷ひ淚のしたゝるを覺えず○噏氣館は結構宏大にて大湯の噴出處にあり、湯瀧蒸氣浴などより總ての物完備し亦良醫學士あり病人の便利最もよし○大湯は晝夜に六回時を定めて噴出すその樣初め轟々として響地底より來りやがて洞口より蒸氣を吐き温泉噴出して洞口より四五間前の石垣を衝くさま實に壯觀なり、かゝる奇妙なる靈泉は歐州は只一ヶ處あるのみにて亦世界中他になしといふ、各温泉宿は樋を以て之を引くなり、亦他に小湯數多あり○樋口、富士屋、相摸屋、鈴木、眞盛舍などよし、この他大小の温泉宿數十軒あり○この地の繁昌今は七八年前の如くならねば物價も大に廉くなり遊客の便利よろし

伊豆山（いづさん）　温泉

小田原より熱海に至る途中伊豆山の麓にあり、熱海の十八町手前なり○伊豆山神社、昔は八十八社ありて關東總鎭護の宮なりき○温泉宿は道より下の濱邊にあり、江戸屋、相摸屋よろし

伊東（いとう）　温泉

熱海より五里にて山道なれば駕、馬などに乘らざる可らず滊船なれば海上平穩にて極樂なり○東京靈岸島より氣船賃六十錢○宿は温泉は淸潔にして然も鐵氣鑛物質に富み諸病に効驗著し○宿は猪戸の樹屋よろし○伊東祐親の城趾

修善寺（しゆぜんじ）　温泉

伊豆國君澤郡にあり熱海より八里その間山道なれど人車駕籠の便あり○修善寺、賴家の殺されし所○正覺院の旭瀧○温泉宿二十六軒その中菊屋、新井、淺羽などよろし

佐野（さの）瀑

東海道佐野停車塲（新橋より八十錢）より西北十二町にて佐野瀑園に至る○飛瀑は高きより下り樹陰は深く眞に三伏の夏を知らず○旅舍は五龍館といふ

我入道（がにふだう）　海水浴

東海道沼津停車塲（新橋より八十六錢）より三十町餘、狩野川の東南に沿ひ南に進めば達す○旅舍は松風館よし

牛臥（うしぶし）　海水浴

松風館より南へ二三町の處に牛臥山あり○旅舍は三島館といふ

興津（おきつ）　海水浴

東海道興津停車塲より（新橋より一圓十錢）西へ七町淸見寺前に海水浴塲あり○淸見寺、いにしへの淸見ヶ關の跡にて禪宗の寺院、この邊庵原の御料地うちに屬す、眼を放てば淸見潟田子の浦は直下につゞきて、駿河灣は伊豆半島その左を擁し三保の松原その右を包めばさながら一大鏡面の如くにて波靜に白帆海に點在し、伊豆の山々三保の松原淸水の港呼べば答へんとするさまなり、眞に東海一の名勝たるに背かず○旅舍は海水樓、一

碧樓などよろし〇名物は興津鯛

あづま路のはてまでゆかぬ庵原の
清見が關に秋風ぞふく　宗尊親王

志太（しだ）　鑛泉

東海道藤枝停車場（新橋より一圓三十二錢）より二十町餘〇旅舍は潮生館

五和村（ごわむら）　潮鑛泉

東海道金谷停車場より（一圓四十錢）北へ二十五町〇旅舍は潮月館

蒲郡（がまごほり）　海水浴

東海道蒲郡停車場（新橋より二圓一錢）敷町なり〇旅舍は健碧館、海月樓　海老屋などよろし

佐久島（さくしま）　海水浴

三河國幡豆郡の南端陸地を去ること二里餘許なる小島なり旅舍は綿屋を首とす

養老瀧（やうらうのたき）

美濃國多藝郡白石村養老山にあり〇瀑の直下七丈餘、元正天皇養老年中行幸ありし瀑なり〇大垣停車場より（新橋より二圓六十三錢）三里餘なり〇旅舍は偕樂社、豆腐亭、掬水樓などよし

長良川（ながらがは）　鵜飼

金華山の麓長良川の鵜飼は實に天下の奇觀なり〇岐阜まで新橋より滊車賃二圓五十四錢〇旅舍は玉井屋よろし〇家形船は一夜二圓七十五錢、小なる物四十五錢位、二三人連より四十五錢、十人以上は二圓以上の船を雇ふべし

香良洲（からす）　海水浴

伊勢の津市より南へ二里（人車賃十五錢）、東京より津迄木曾川を舟にて渡す外滊車全通す〇香良洲神社〇伊勢內海の濱にて白砂青松遠く連なり風光明美勢陽第一の名勝なり〇旅舍は松坂屋よろし

二見の浦（ふたみのうら）　海水浴

伊勢の山田より二里餘（人車賃十五錢）なれば參宮を兼ねて遊ばゞ宜からむ〇二柱の立石、日の出は古よりの名物なり〇旅舘は〇賓日館、清渚亭などよろし〇土産物は貝細工

今ぞしる二見の浦のはまぐりを
貝あはせてひらふものとは　西行法師

布引の瀧（ぬのびきのたき）

神戸三の宮停車場より東北二十五丁にあり〇旅舍は常盤、富貴樓、菊水などよろし

須磨（すま）

海岸一帶白砂青松遠く連り、鐵拐峰鉢伏山、鵯越などを負ひて內海に臨み、淡路島は呼べば答へんとす、風光明美景色絕佳なり〇海水浴ひらけし以來遊人多く來りて雜沓甚し、亦往年の家も定ぬ雛たれ海士の子らが住處にあらず〇神戸より滊車賃五錢

わくらはにとふ人あらば須磨の浦に
藻汐たれつゝわぶとこたへよ　在原行平

有馬（ありま）　溫泉

攝州有馬郡湯山町にあり、古より著名の温泉なり〇大坂よりは住吉停車場より六甲山を越ゆ瀧の川に沿ひて愛宕山の麓にかゝるを近道とす〇旅舍は奥の坊、二階坊、池の坊など八軒あり〇名産は竹細工、山椒など

住吉（すみよし）　海水浴　名所

大坂難波停車場より僅に四哩許なり〇官幣大社住吉神社、祭神は上筒男神、中筒男神、底筒男神、神功皇后なり、この三柱の神たちは神后三韓征伐のをり船を守らせ給ひし神にて夢のみ告により神后こゝにいつき祭らせ給ひき、さればこの神たち船守の神なり亦和歌の神なりといへば嬢たち詣ではよく祈り給へ〇そり橋〇石燈籠〇種貸神社、本社の瑞垣の外左手にあり、子なき女には種を貸し給ふとて種石神前にあり〇住の江の岸までは神社より松原を十町程あり、〇海に浴する間には忘貝拾ひ忘草つみて世の憂をわすれ給へ

住のえのかつくはふりが神言と　ゆくとも來とも船ははやけむ　多治比眞人土作

沖つ風ふきにけらしな住の江の　松のしづえをあらふ白浪　經信

嚴島（いつくしま）　名所

日本三景の一にて絶景なることはいふまでもなし〇嚴島神社、祭神市杵島姫命、清盛、元就などを初として歴史上の關係多し、海中にわたせる廻廊、千石船の下くゞるといふ鳥居、千帖敷など皆眼を驚す種なり〇旅舍は紅葉谷の茶屋よろし〇神戸より廣島まで滊船賃七十錢、廣島本河より嚴島まで和船にて五錢

多麻川（たまがは）　鮎とり

六郷川の上流にて東京水道の源なり〇飯田町停車場より一番發（五時）二番發にて出で終列車に歸京せば充分の慰なり〇鵜飼舟（引網付漁師三人）一組五十錢、屋根舟一圓

高雄山（たかをさん）　瀧

八王寺（飯田町より滊車賃三十五錢）より淺川村といふ處にゆき、それより登り三十町なり〇高丈餘の琵琶瀧といふあり〇日歸りにてもよし、旅舍は角屋、倉田屋などあり〇秋は紅葉よし

金澤（かなざは）　名所　海水浴

古金澤文庫のある所にて絶景の地なり〇鎌倉より朝比奈切通を經て二里十町〇八景の勝あり則、州崎の晴嵐、瀬戸の秋月、小泉の夜雨、稱名寺の晩鐘、平潟の落雁、内川の暮雪、野島の夕照

横須賀（よこすか）　海水浴

新橋より滊車賃三十九錢、東京靈岸島より滊船賃二十五錢〇造船所鎮守府〇要塞砲兵〇米ヶ濱の臺場下に海水温浴の家あり、前に猿島を望みて風景絶佳なり

大津（おほつ）　海水浴

三浦郡にあり、横須賀より人車賃十四錢〇旅舍は大津舘といふあり

浦賀（うらが）　海水浴

靈岸島より滊船賃二十錢、横須賀より人車二十五錢〇旅舍は舘山、吉川など宜し〇砲臺あり、ペルリの米艦ゐて來り泊せし以來不可忘の港なり

稲毛　海水浴

千葉より一里程手前なり、千葉迄東京本所停車場より汽車賃二十七錢○海氣館といふ海水浴場あり、海は遠淺にして危險の憂なく岡は白砂清松鮮かなり

保田　海水浴

鋸岸島より汽船賃二十四錢○旅舍は吉田屋よろし○浮島を前に望風光よし、浮島は景行天皇の行宮のありし處なり

鋸山

保田より十四五町にして鋸山公園あり、老木欝蒼として日光をさへぎり日本寺といふ古刹あり、五百羅漢を以て名高し○鋸山の頂上は十州一覽の勝あり

北條　海水浴

房州にあり靈岸島より汽船にて館山につく(船賃三十錢程)○北條は館山の町續きなり○旅舍は木村屋がよろし

鹿野山　納涼

上總國周准郡にあり木更津迄靈岸島より氣船に乘りそれより頂上までは三里餘○山上眇々館といふあり

大宮公園　納涼

上野停車場より汽車賃二十錢○氷川神社、官幣大社にて素盞雄命を祀る、武藏一の宮なり○公園は木立陰深く、池あり舟を浮べ螢狩に茸狩によろしく、一日の遊覽に適す○旅舘は藤の戸、高島、含翠樓など宜し

伊香保　溫泉

上州西群馬郡にあり、高崎停車場(上野より七十六錢)より七里十五町、人車の便あり○溫泉宿は木暮金太夫、同武太夫などよし○八景あり、上の山の月、關屋の雲、榛澤の猿、物聞山の郭公、丸山の躑躅、高根の鹿、二ツ嶽の雪、伊香保沼の菖蒲

榛名山

伊香保より榛名神社まで二里十八町、山道ならば緇の外車馬を通ぜず○御師の家に宿泊せしむ

澤渡　溫泉

前橋停車場(上野より八十三錢)西北十一里、上野國吾妻郡上澤渡村にあり○溫泉宿は福田屋はじめ五六軒あり

四萬　溫泉

同郡にあり前橋より十三里○溫泉宿は小倉屋、關善の二軒あり○近傍の名所は小倉瀧、摩谷瀧、蠟石山、水晶山、大泉、小泉なり

川原　溫泉

四万溫泉へ行く途中にあり○溫泉宿は萩原、升屋などあり

草津　溫泉

吾妻郡の西北山奥にあり、前橋より十六里餘○溫泉宿は黑谷、山本、外數軒あり

藪塚　溫泉

両毛鐵道の大間々停車場より二里十三町○溫泉宿は今井樓、町田

(未完)

毎月二回十日廿五日發行

國光

本誌の改良は號を逐ふ毎に之を證して餘あり。其國光は公平至正の眼識を以て獨立獨歩の議論を縱橫し。其劍光は名士高材盛に雄大警拔の意見を上下す。瑰績偉行鏡影是を輝かし。春秋褒貶雜錄之を收む。文苑あり歌、詩、文、并び載せ。時事あり皇、清、洋、盡く記す。彼の政黨以外に在つて時務を知り世勢に通ぜんと欲する者、必ず先づ本誌を讀まざる可らず、彼の政黨内の徒にして常に中正の針路を執らんと欲する者亦必ず本誌を讀まざる可らず。

投稿三則　論說　着實を主とす。歌詩。脂粉を擯く。文章　浮華を禁ず。

(定價一册金拾錢十二册(半ヶ年分)金壹圓拾錢廿四册(一ヶ年分)金三圓外に郵税一册金壹錢)

國光第十卷第五號

東京々橋區築地貳丁目貳拾貳番地
發行所　國光社
(電話番號一九四六)

●紳士貴夫人海水浴の要具●

●特許 防浪救命器の特功及構造

●防浪救命器は假令游泳術を知らざるもの若くは孱弱者(婦女老幼の如き)と雖も之を着用するときは風濤險惡なる水中に於ても決して溺死するの憂ひなし●防浪救命器は激浪山を還へすも敢て顔面を撃つに至らず又木材岩礁に衝突するも頭部を損傷するの憂ひなし●防浪救命器は肩胛以下水中に侵入し以上は水面外に露出しいかなる怒浪と雖も身體常に直立の方向を取りて偃臥の患ひなし故に鱶其他の惡魚に害せらるゝことなし然るに從來の浮具は風浪飜澇するに遇へば忽ち水中に顚沒し横倒するを免れず防浪救命器は甲兜部あるが故に炎熱及寒風を防ぎ頗る海水浴に便なり●防浪救命器は甲兜部あるも常に縮小するを得るか故に其容積は却て從來の浮具よりも小なり●防浪救命器は着衣の儘二三秒にして之を着用するを得るか故に何程危急の場合にも容易に之を利用するを得べし●防浪救命器は毫も游泳の爲に力を勞するの患なきを以て長時間激浪中に漂泛するも格別疲勞を感ずることなし●防浪救命器は日本特有の材料を以て製造し其浮上力は「コルク」に勝るも劣ることなく而して數十ヶ年耐力に變狀を呈することなし

●防浪救命器の證明

●防浪救命器は遞信省管船局に於て十數回の試驗を行ひ最優の浮具(ライフブイ)たることを認可せらる●防浪救命器は紀海、大坂灣、淀江津及横須賀沖等の各所に於て激浪怒濤するの日數回の試驗を行ひて皆最良の結果を得特に横須賀鎭守府長官海軍中將井上良馨君より最優等の證明を下附せられたり●防浪救命器は加藤、大石兩理學士の精密なる學理的試驗有効耐久の説明と田所海軍大機關士及出雲丸船長南出氏の實地及實歷的試驗の有効證明書あり●防浪救命器は水難救濟會及水産會等の贊同を得て其備付品として買收せられ特に水難救濟會に於ては其報告書に其有効なることを記述勸誘せられたり

●防浪救命器の代價

一 防浪救命器 壹個 金五圓也

東京市京橋區
元數寄屋町壹丁目壹番地

防浪救命器製造本部

暑中御見舞
愛讀諸君の健康を祈る

國光社

東京築地二丁目廿一番地（電話番號一九四六）

子宮病血の道症

にて惱み種々の藥を用ても其効なく年久しく御困の御方は必ず此くすりを一度御試あれ

數年の血の道快全の圖



（効能大略）

●産後の古血にて病らふ人●子宮病血の道にて惱める人●下腹腰足引つり痛み●腰より足部の冷る人●こしけ、しらち、ながち●月經順りの惡き人●息ぎれし動氣つよく●背より肩首筋へこり上せ●耳なり目かすみ頭痛甚だしき人●又物事を苦にし氣分惡く久くれ困の人は早く試よ

子宮病血の道藥

登録商標 **中將湯**

定價		郵税
一日分（二貼）	七錢	二錢
三日分	廿錢	二錢
一週間分	四十五錢	四錢
二週間分	八十五錢	六錢
三週間	一圓廿五錢	八錢

郵券代用一割增

名譽

醫學博士慈惠病院長高木兼寛先生證明（東京）
婦人科醫學士櫻井病院長櫻井郁二郎先生證明（東京）
婦人科專門醫緒方病院長緒方正淸先生證明（大坂）
婦人科專門ドクトル佐伯理一郎先生證明（西京）
婦人科專門獨逸ドクトル朝山義六先生證明（橫濱）
其外四十餘名の大醫先生より稱賛を忝うしたれども略す

●中將湯は各藥店にあり無くば本舖へ申込あれ爲替は東京本局
●本舖へ御注文の御方は病人の容體詳しく御申込あれ

本家 東京日本橋通四丁目七番地 **津村順天堂**

社告

本誌編輯上、都合有之候間、左の三回に限り、左の締切日限迄に、兼題原稿、御送附相成度候

八月廿日の分は　八月十日締切

九月五日の分は　八月廿五日締切

九月廿日の分は　九月十日締切

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及遞送にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事　○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし　若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事　○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十八年八月四日印刷
同　年八月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛

同
編輯人　山根勇藏

同
發行所（電話番號一九四六）國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）